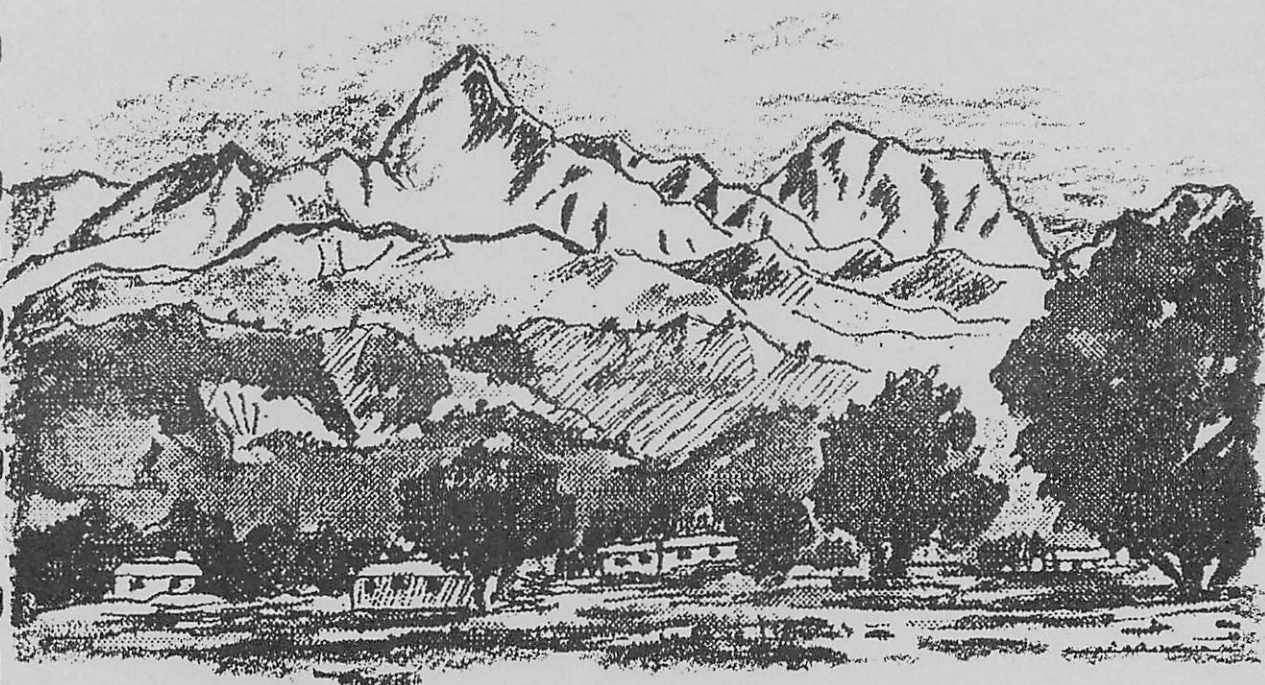


北関東の山無し県

茨城のクライマー集団の会報

R&V² 3号

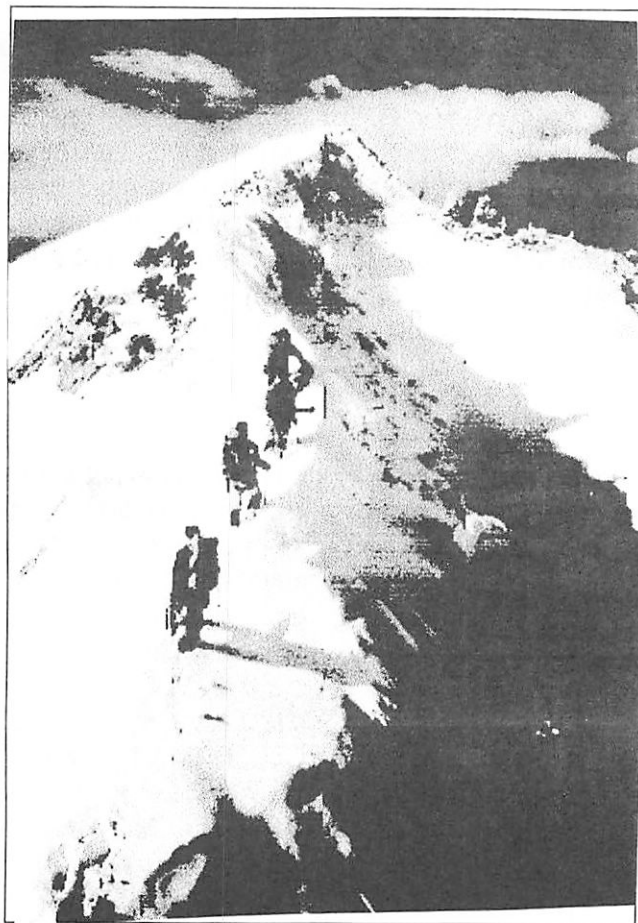
1996年10月～12月



ACC-J 茨城

目指せヒマラヤ!!

Rock and Valley 96 秋 No. 23



雪の荒沢岳を目指す 96' 11 《photo by K. motozu》

雪、岩、沢に青春をかけた若人の記録集
アルパイン・クライミング・クラブ・オブ・ジャパン・茨城

私は田舎育ちですから、子供の頃、秋になるとよくキノコ採りに行った。知識が少ないので、採るキノコは7種類位で、その他のキノコは採らなかった。私の近所の山にはミズナラの木はないし、マイタケというキノコはなかったので、当然そんなキノコは知らなかった。マイタケを知ったのは、山に行くようになって、道路沿いにある土産屋に売っているのを見てからである。数年前、群馬に団体旅行に行ったとき、マイタケの栽培農家を見学した。その時のガイドは、マイタケは非常に貴重なキノコで、栽培が可能になるまでは、一般の人はなかなか食べられないキノコだったと説明していた。その時見たマイタケの姿形が頭の中に入り、それと同じものが山に生えているものと思っていた。

10月初旬、某山岳会のT氏に誘われ、マイタケ採りに行った。場所は群馬県某所と言っておく。メンバーはT氏の他、S氏とM氏、それに私の計4名である。

T氏は地元出身で、子供の頃からマイタケ採りをしていたという。だからこの場所は、いわゆるT氏のシロ（漢字が分からない）である。T氏は

山菜キノコに詳しく、以前、会津にてユキザサを生で食べさせてもらい、あの旨さに感動したことがある。T氏は、マイタケ以外のものは“駄キノコ”といって採らない。いくら自分のシロといっても、他の人も知っているかもしれない。いつもマイタケが採れるとは限らない。マイタケが採れなかった場合には他のキノコを採ることもあるとおっしゃっていた。

S氏は、これまた山菜キノコに非常に詳しい。キノコのある場所の見つけ方や、料理のしかたの話を聞いているだけで、その知識の多さは想像できる。彼はT氏と違ってマイタケ以外のキノコも採る。

M氏は私と同様マイタケ採りは今回が初めてである。

この総勢4名が、前夜目的とする沢の堰堤上の河原に集合した。私は既に皆さんとは顔見知りであり、焚き火をしながら一杯やり始める。T氏は“今日は保険を掛けておいたから大丈夫だ”と言っておられたが、私は始め言っている意味がわからなかった。話をしているうちやっとその意味がわかってきた。T氏は前日、別のシロに入り、既

にマイタケを収穫していたのであった。せっかく茨城の方から来たのに、採れなかったら申し訳無いというT氏のお気遣いには感謝感激であった。

明けて翌日は快晴の良い天気。車を一台、沢の上流に置き、4人で沢の左岸を詰めようとの計画である。しかし、このシーズンのこの天気、他にもキノコ採りの人々がたくさん入ってきた。直接上流に入る者、中流から入る者といろいろだ。このままだと下流から詰め上がるまでに中上流は採られてしまう恐れがでてきた。急遽鳩首会談を開き、全員中流から入り、2パーティに分かれて私とT氏は上流へ、S氏とM氏は下流に移動することに変更した。昨年、会津で買ったカゴを背負って意気揚々と出発する。実は一度これをやりたかったのだ。キノコカゴを背負ってキノコ採りをしたかったのだ。T氏の歩くスピードはとても速く、いくら急いでも追いつけなかった。T氏は、某ミズナラの木を目指していたのであった。某ミズナラの木がマイタケの生えている確率が一番高い木だったのである（この木を“某山岳会の木”というらしい）。そしてその木の根元を見たときT氏は“あった！間にあった！よかった！”と叫んだ。

どれどれと言って覗き込むと、そこには今まで見たこともない光景が目に見え込んできた。“うわぁ～すげえ～何だこれは！キノコのお化けじゃねえの”初めて天然のマイタケを見たときの感動は、ただただ“驚嘆”の一言でした。それは正しくキノコの王様にふさわしく、あの栽培農家で見たものとは姿、質、量とも全く違っていました。7キロ位はありそうです。早速記念撮影をして収穫したが、持ったときのあのズシリとくる重さには、マイタケ採りにヤミツキになる人達の気持ちがよくわかった。籠はキノコで一杯になった。本当のことをいうと、籠は大小2種類買ったのである。背負い籠（大）と腰下げ型（小）である。今日は大きいのになぜか拘った。ムシノシラセというやつかも知れない。もう私は満足してしまい、他にいくつかの種類のキノコを採って、早々とペースに戻った。

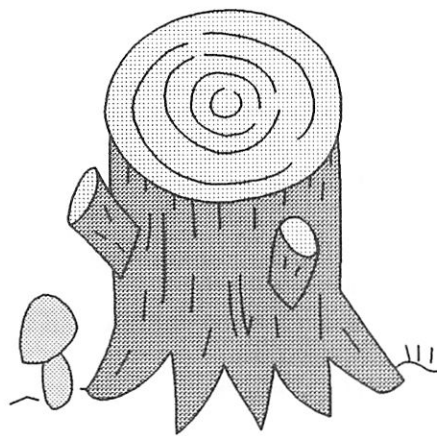
やがてS氏とM氏も戻ってきたが、さすがスペシャリスト、彼らのザックには立派なマイタケと袋一杯の他のキノコが入っていたのである。4人で総量15キロ位あったのではなかろうか。

S氏の作るマイタケ料理を肴に飲む酒は最高で、

最後はマイタケうどんで締めくくり、いままで栽培物でさえ数回しか食べたことのない私には、天然マイタケで腹一杯になるなんて、とっても贅沢な一日であった。帰りはマイタケ他クリタケ、山栗など、いっぱいのお土産をもって、得意満面で50号線を茨城に向かったのである。

昔、当会は会員外との山行は禁止であった。現在その会則は改められ、会員外との山行は認められている。関東沢屋交流会の先生方、浦和浪漫や水戸葵、大阪の池上氏や東京マタギの深瀬先生ほか、いろいろな岳人と山行を共にできた。その度に、いろいろな知識、技術を得られた。そして、私の山に対する考え方や取り組み方が変化していったのは歴然としている。

残念ながら現在当会に山菜キノコに詳しい者はいない。当会員も会という小さな器の中だけではなく、機会あれば他会員との山行も経験してもらいたいし、私もそのような機会を作るよう努力したいと思っている。ただし、主体となるのは会員同士の山行であることは言うまでもないが。



(本図一統)



マイタケの大株を発見し、ニンマリの本図

《目次》

1996年 秋号10月～12月 ACC-J 茨城

巻頭言	・・・ 1
集会報告	・・・ 4
山行報告	・・・ 5
伯耆大山	・・・ 6
宮崎の岩場（その1）広タキスラブ	・・・ 6
宮崎の岩場（その2）比叡山1峰ニードル左岩稜	・・・ 7
谷川岳一の倉沢 2ルンゼ～Aルンゼ	・・・ 8
黒伏山南壁Dフェース凹角ルート	・・・ 9
清津川・釜川右俣	・・・ 10
赤城山（黒檜山）&榛名山（榛名富士）	・・・ 11
山岳救助訓練	・・・ 12
明星山P6南壁左フェースルート	・・・ 13
明星山P6南壁左岩稜	・・・ 14
明星山南壁ACC-J直上ルート	・・・ 16
松木沢ウメコバ尾根末端壁直上ルート	・・・ 17
西上州・毛無岩	・・・ 18
冬山訓練・荒沢岳（Aパーティ）	・・・ 19
荒沢岳前ぐら尾根（Bパーティ）	・・・ 19
冬山訓練・荒沢岳前ぐら尾根（Cパーティ）	・・・ 20
ナーゲル際“筑波ふれあいの里にて”	・・・ 21
蓼科山	・・・ 22
雪上訓練・富士山	・・・ 23
甲斐駒ヶ岳黄蓮谷右俣	・・・ 23
中央アルプス縦走（中退）	・・・ 25
中央アルプス下山遅延の問題点と反省点	・・・ 26
友好団体の月報・会報・その他	・・・ 29
編集後記	・・・ 32

表紙絵…ボカラからの展望 (*Machapuchra & Annapurna* III を望む) by... I. Nami

集会報告

(於、スカイラークガーデン)

-----【 10月 】-----

10月 2日

出席者 本図、鈴木、今井、今村、菊地、笹平、高木、澤田、新美

10月16日

出席者 本図、古山、笹沢、鯉河、木村、菊地、新美、紺野、高木、坂本(意)
笹平、今村、澤田、告

10月30日

出席者 本図、古山、新美、今村、今井、紺野、告、菊地、木村、笹平、澤田

-----【 11月 】-----

11月13日

出席者 本図、坂本(罰)、古山、坂本(意) 高木、笹平、菊地、鯉河、今井

11月20日 リーダー会

出席者 本図、鯉河、古山、菊池、木村、告、笹平

11月27日

出席者 本図、古山、中島、告、新美、紺野、笹平、菊地、生井、木村、今村
鯉河、澤田、坂本(意)

11月30日～12月1日 《 ナーゲル祭・筑波ふれあいの里にて 》

*ACC-J茨城メンバー(14名)本図、木村、菊地、鯉河、中島、生井、栗原、古山
告、笹平、笹沢、新美、今村、高木、坂本(意)

*ACC-J東京メンバー(8名)水島、名雪、阿部、松原、仲川、金沢、矢武、吉田

-----【 12月 】-----

12月11日

出席者 本図、古山、木村、坂本(意) 新美、生井、澤田、紺野、告、今村

12月25日

出席者 本図、坂本(意)、新美、古山、告、笹平、菊池、木村、紺野、澤田

山行報告

《 1996年 10月～12月 》

---【 10月 】---

10月 3日	伯耆大山	L古山
10月5～7日	宮崎の岩場	L高田、古山
10月 10日	谷川岳一の倉沢・2ルンゼ～Aルンゼ	L鈴木、今井
10月 10日	黒伏山南壁凹角ルート	L古山、本図
10月12～13日	清津川・釜川右俣	L澤田、高木
10月 13日	赤城山・榛名山	L古山、本図
10月 27日	救助訓練・藤坂ロックガーデン	L古山、本図、笹沢、今村、高木、木村、 菊地、鈴木、今井、告、笹平、新美、紺野

---【 11月 】---

11月 3日	明星山P6南壁左フェース	L武藤、本図
11月 3日	明星山P6南壁左岩稜	L古山、生井、告
11月 4日	明星山P6南壁ACC-J直登ルート	L古山、生井
11月 10日	足尾・ウメコバ尾根末端壁直上ルート	L本図、今村
11月 17日	西上州・毛無岩	L本図、高木、坂本(恵)
11月23～24日	雪上訓練・荒沢岳前ぐら尾根	L笹平、澤田
	// //	L告、本図、今村
	// //	L古山、新美、紺野
	// //	L木村、菊地

---【 12月 】---

12月 8日	北八ヶ岳・蓼科山	L本図、古山、坂本(恵)
12月 14日	岩トレ・御岩山	L古山、坂本(恵)
12月 15日	雪上訓練・富士山	L古山、本図、木村、菊地、告、澤田 新美、紺野、坂本(恵)、今村
12月22～23日	甲斐駒ヶ岳黄蓮谷右俣	L古山、中居
12月22～24日	中央アルプス縦走	L本図、笹平、坂本(恵)

伯耆大山

1996. 10. 3

パーティ 古山正文

山口に行く予定があったので時間があれば秋吉台の鍾乳洞見学に行くかなと考えていた。しかし週末は高田さんと九州の岩場に行くためにどこかで絶対にトレーニングしなければならないので、よく調べると大山はそれを行う事にふさわしい事が判り、自らその試練を受けに行くことにし、そこに決めた。

米子駅から大山寺行きのバスで約1時間、終点の大山寺の旅館街に着いた。登山口に移動し、登山届を出して、早々地獄のトレーニング開始である。静かな樹林の中の階段状の山道をしばらく行くと大山寺の阿弥陀堂の建物や講堂跡が道の横に現れ、このトレーニング地獄から救ってくれるように願わずにはいられない。登山道も急になり、6合目の避難小屋に着く。辺りは低木となり大山の北壁がよく見える。これより上ではガスがかかり全く眺望はきかなくなってしまった。傾斜が緩んだ頃に木道となり、やがて小屋（きやらぼく荘）の前を通り弥山（みせん）山頂に着いた。ガスが濃くなりしっとりと濡れてきたので雨具を着込まなければならない（更なる試練となった）。ここまで2時間近くもかかってし

まったが、トレーニングを止める訳にはいかない。大山最高峰の剣ガ峰を回って下山する事にした。弥山からの道は今までのとは全く異なり、左右が切れ落ちたぼろぼろの稜線となっていた。剣ガ峰を越え少し行くと分岐となり、慎重に進みユートピア小屋に着いた。少し休んで三鈴峰をビストンし元谷方向に下りて行く、トラロープの箇所があり、沢に下りる。沢には雪がぎっしりと詰まっていた。北壁はボロボロ（落石地獄だ）で落石がこないように祈りながら急いで下りる（やはり地獄のトレーニングだ）。沢が広くなり元谷小屋が見えるようになってから、ゆっくりと大山寺に向かって下りて行った。大神山神社（お寺の大山寺はさらに数分下ったところにある）に着いて今回のトレーニング地獄からようやく救われた。後で聞いた事だが、大山は何とか言う百名山とかに入っているらしい、まあ私には余り興味の無いことであるけれども。

（古山 記）

宮崎の岩場（その1）ー広タキスラブー

1996. 10. 6

パーティ L高田暢年、古山正文

そもそもこの山行は夏合宿に高田さんが参加した時に計画されたもので、その行き先は電話連絡の末に宮崎の岩場に決まった。集合場所の宇部川東駅は少し前の荒川沖駅西口という雰囲気だった。高田さんは新車エスティマで現れたが、ガムテープで補強された左サイドミラーは痛々しかった。関門海峡は高速道路で行くと橋で越え、一般国道で行くとトンネルを通ることになるそうだ。我々は宇部から高速に乗り海峡を越え小倉でおいて、大分を目指す。大分を少し過ぎた所で裏国道に進み、祝子川（ほうりがわ）沿いの大崩山（おおくえさん）登山口に向かう林道の途中の、広タキスラブへ向かう登山道入口付近で車を止める（初めてでは判らないだろう）。翌朝、その登山道を登り、これまた初めてでは判らないだろう沢に下る微かな踏み跡にすすむ。沢を渡ったところで道に迷ったが、沢沿いを進み、20mと15m位の岩場を固定ロープを頼りに登ると、広タキスラブに着いた。初めは広タキスラブ入門ルー

トの左フェースルートに取り付く。1ピッチで3つ位のランナーしか取れないので、落っこちたらズーと摩擦たつぷりに落ちて、大根おろしにもた人間おろしとなることは、まちがいない。痛そーだ。ホールドは基本的には全く無く、ただ手の平を岩に当ててバランスをとるだけである。1P目、くの字状に登るが、どこでも登れそうであるが、追い込まれるとランナーを取る事ができなくなるだけではなく、ビレー点にも行き着けることができなくなりそうだ。2P目、右斜上し50cmの段を越え直上。スタンスはスラブの小さな結晶粒の凸部分で、まず片方の足をその上に置き、静かに体重を移動し全体重を預け、そして次のスタンスを探し反対の足を乗せ再び静かに体重を移動する。この時ズリッとほんの微かだが音が聞こえるときがあり、冷汗がどってでてくる。3P目、直上。4P目、左斜上し草の付いたリッジ状、少しだけスラブの緊張が和らぐ。一本松でビレー。5P目、15mのスラブのトラバー

スから直上、再び緊張が高まる。6 P目、傾斜の緩んだスラブを登り、樹林帯に入り終了。終了点から、4 P懸垂下降して取り付けに戻る。

午後は右フェースルートに登る。左フェースルートよりも傾斜がきつく人工が混じる。1 P目、ボルトが抜けていて非常に悪かった。2 P目は、スラブを右斜上して右にある樹林帯上部を目指す途中のA0でのシュリングがどうしても取れずトラバースして樹林に入り、ピレー。3 P、右にトラバースしてからクラックスラブ状フェース。4 P、人工で

スラブフェースから樹林帯。5 P、スラブからクラック移るところで支点が抜けていて悪い。最後の6 P、再び人工である。スラブの人工なのであぶみの上段に乗って体を岩にびったりとつける感じでおもいきり伸びて次の支点を取らなければならない。樹林帯に入って終了。樹林の中を左フェースの終了点まで移動し、懸垂して下る。時間がかかりすぎ、車までの下山途中でヘッ電を出さねばならなかった。

(古山 記)

宮崎の岩場 (その2) —比叡山 1 峰ニードル左岩稜—

1996. 10. 7

パーティ L. 高田暢年、古山正文

広タキスラブ登攀を終え、18時半頃に車で次なる岩場比叡山を目指す。一旦延岡市に入り、スーパーで食料を買い込み五ヶ瀬川沿いの国道を高千穂、阿蘇方面に向い、槇峰からそして比叡山に向かい、1峰南面基部の駐車場で車を止める。ここには公衆トイレもあり、水も取れる。早々テントを張って宴会。

比叡山山頂までの登山道を歩き30分位で取り付けに着いた。1 P目、クラック沿いをS字状に登る。2 P目、フレークからクラックそしてテラスであるが、3回ほどあぶみのお世話になった。3 P目、ニードルの頂点へのクラック。人気ルートであるので、岩が比較的磨かれていて滑り易かった。4 P、15mの懸垂下降。5 P目、再び左岩稜の登りとなるが、もう稜ではなくフェース状である。正規ルートは時間がかかりそうなので、その右側の簡単なところを3 P登り、1峰頂上に着いた。3 Pの懸垂で北面の登山道におり、取り付け、車へと戻った。

登攀も恙無く終了し、さてどうやって帰るかである。帰りの手配は全くしていない。阿蘇経由で小倉に戻り新幹線に乗るか、延岡または大分あたりから寝台に乗るかの2通り程考えていた。とりあえず延岡—大分と戻り、大分駅の旅行センターで調べると、羽田までの飛行機がありそれに間に合いそうだったのでそれで帰ることにした。高田にさんは一人で宇部まで車を運転して帰らなければならなくなってしまう、すみませんでした。駅前で遅い昼食(早めの夕食)をとり、大分空港行きのバスに乗り高田さんと別れた。18:40分発の飛行機に乗り羽田に向かった。高田さん次は行勝山(むかばきやま)を宜しくお願いします。ありがとうございました。

(古山 記)



谷川岳ーノ倉沢2ルンゼ～Aルンゼ

1996. 10. 10

パーティ L 鈴木操、今井弘

久しぶりに一ノ倉へ帰つて来た！。この感傷的な表現が本谷バンドで私の胸中をノスタルジアが走る。20代の私を鍛えたワン倉は、草紅葉に染まりカラフルなクライマーが各ルートに花を添えている。今年は残雪が多く、滝沢下部に巨大なクレバスを作りテールリッジ末端まで雪渓が残っている。今日の2ルンゼ～B又はAルンゼは、山頂～西黒尾根と長丁場であり、登る速度は私に合せスローペースである。パートナーの今井君は、剣岳の合宿で気心の知れた会員で、彼のエネルギーな登攀が心強い。F1を目前に右壁を登るが、余り斜上した為に、美味しい処をスルーした。彼曰く、『降りて、やり直しましょうか？』『ナヌーウ！』冗談じゃない、ゼエゼエしながら追い着いた私に笑顔向け、余裕のポーズ。と思つたら『このままツルベで行つて下さい』『ゲッ！』顔とは裏腹に、これは強要である。今度はルンゼ通しに登るが、水が流れ、沢登りの様子で指も冷たくグリップに力が入らない。大きなチョックストーンが行く手を阻み、濡れた右壁に彼が動く、

順層でガバも有るので問題なくクリヤーする。この間、クリップするハーケンが少ないのでスリップは許されない。石門を通りザッテルに到着、眼下に出合の車、右手は滝沢スラブの草付がコケの様に黄色のスベリ台と化している。左手の5、6ルンゼ、上部の本庄山の会ルートには4名が取り付いている。パノラマビューを楽しみ、今井君は大満足。テラスの角にボルトとシュリングが有り、20mのザイル下降で広河原に着く。かなりの水が流れキャンプが可能な広さである。左岸のマッターホルン状岩壁の下部を巻いてBルンゼ、水量の多いAルンゼは黒く、急峻でV形の暗い雨樋の様相である。前後に人の気配も無く、水の流れる音が岩壁に反射しサラウンドで聞こえる。『Aにしますか、Bですか？歯応えのアル方にしましょ！』。又も脅迫の目線で彼は迫る。コノーオ！ランチの注文じゃねんだゾ、俺は早く稜線に出たいんだ、コンテでF1に着き右壁を登るが、シャワークライムとヌレてる壁が5級に感じ、易しい方へ登つてしまう。ツルベで草付を左上

し、ルンゼに入るが確実なビレービンの無い確保に『オーイ絶対にコケルなっ』。彼は緊張した顔で近寄り『良くこんな処が登れますね、流石、往年のクライマー！次もお願いしますっ！』『ナヌー！』食欲の無い水腹の私は、今や気力で頑張っているのに、コンテで次の滝下でザイルを捌き直し、右壁にルートを取るが、錆びたハーケンに切れそうなシュリングで胃が痛くなる。目前に最後の悪場が見え、気が重い。ドーム岩壁の基部とマッターホルン状岩壁に挟まれ、巨大なチョックストーンでルンゼを塞いでいる。ルート図では左の一枚岩を登る、とあるが威圧感の有る壁で難し相な様子。ココはオダテに乗らず、今井君にバトンタッチする。ヌレたルンゼを直上し、左ヘトラバルがホールドが無く、行きずまる。不安定な姿勢でハーケンを打ち出すが、リスが浅く諦め、元に戻り2人でルートファインディングする。『アッター！』泥に染み見えにくい、ハング気味の出口にシュリングがブラ下っている。彼はアブミを利用しクリヤーするが、次の事に気づいていただろうか？クラックに握り大の石を入れロープを巻きつけ、ナッツ代りに利用している。下へのテンション（垂直加重）は良いが、水平に引けば

ズッポ抜ける仕組みなのだ。確保点を探すのかスルスルとザイルが動き、ビレー解除のコールが掛る。『スゴイねえー、ヤッタねえ〜』オダテと逆上がりぐらいいは、私にも出来る。私に出来ないのは、お産と蹴上りぐらいで平均的な人間である。さて、目前に国境稜線と見えたのは間違い、これは支稜でこの先、長い草付が待っていた。ガスは葉に水を含み、根元はグジョとスポンジ状で滑落の危険、大である。“今井君、ここは俺に任せろ！”長年の経験でチョツとしたコツがある。草の葉を引かず、根元に5本指をアイゼンの要領で荷重し、雪壁につま先をケリ込む様にする。更に、草で見えにくい、先行パーティの踏み後を利用すれば、急斜面もクリヤーできる。30分程のアルバイトで稜線に踊りでる。満足感よりも、ヤット脱出した気分で握手に何度も力が入る。ガチャ物を整理し、トマの耳へ歩き出す。15:30の今、日没時間が気になる。西黒尾根からマチガ沢の2時間は、ヒザが痛む私には拷問の道のりだ。昔の靱帯損傷による後遺症である。見事な紅葉も今や余裕で楽しめず、足元に気に取られ、シャリバテの兆候がでた。蔵新道で今井君に先行してもらい、車の回収を頼む。1時間の遅れに心配

し、彼のライトの誘導で、マチガの出合に着いた時には、全く人影の無い暗闇だった。

ザッテル着(11:15)ー国境稜線(15:25)ーマチガ沢出合(18:00)

天候…曇り

ーノ倉沢出合(05:45)ーニルンゼ発(08:20)ー

(鈴木 記)

黒伏山南壁Dフェース凹角ルート

1996. 10. 10

パーティ L古山正文、本図一統

久々の黒伏山である。20年ぶり位だろうか。高速道路は山形まで延びたし、便利にはなったが、あまりにも変わってしまい、黒伏山方面への入り口もわからなくて少々迷ってしまった。南壁正面にはスキー場も建設中で、道路も拡張され完全舗装道路(一部工事中)になり、登山口もわからない始末。とりあえず明るくなるまで寝ようと柳沢小屋に移動して一杯やる。柳沢小屋付近は昔と変わっていなかった。

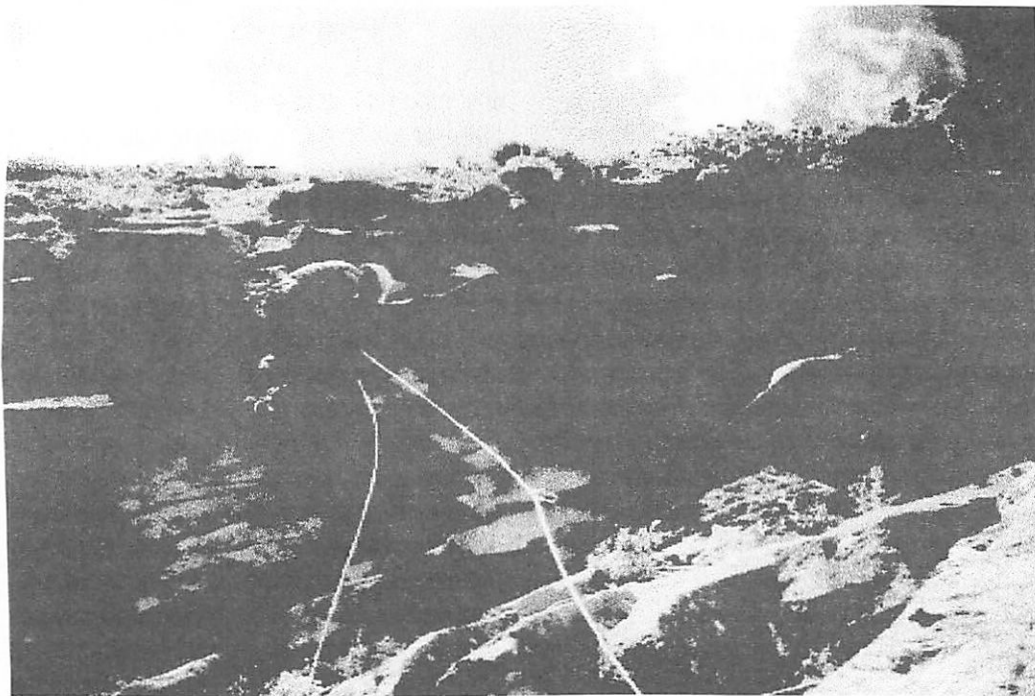
翌日、乏しい記憶を掘り起こし、少しの偵察で登山口を発見できた。南壁の下に立つと少しずつ記憶が蘇ってくる。あの頃は山の中の静かな岩場だったが、いまは正面のスキー場の建設が急ピッチで進められており、重機の音がうるさい。

いつものごとくリード古山、フォロー本図で取付く。

1ピッチ目、フリーで登るがちょっとブッシュがうるさい。黒伏山南壁の良いところは、傾斜が強く

岩が堅いので、思い切ったクライミングができるところにある。フラットソールが乾いた岩に良く効く。

2ピッチ目、ルートは2つに分かれるが、古山は右の初登ルートに行くようだ。凹角にルートがとられており、これがルート名になったらしい。一部フリーが入るが、概ね人工で行く。古山は一部効きの悪いハーケンがあり怖いと言っていたが、フォローの私には快適の一言であった。私の感じではアルパインでは効いている方だと思う。古山はハング下の小さいスタンスでビレーしていたが、場所が良くないので、私は右のカンテ上にあるスタンスまで登る。ここは恐らく転向ルートのビレー地点であると思われる。天気は良好だし、高度感は素晴らしく、気持ちが良い。しかし何族というのか知らないが、下の道でクイックターンの練習をしているようで、キーキーとタイヤの軋む音が少々耳障りだったが、それよりも私の車が止めてある付近でやっているの、ぶつけられるんじゃないかと気が気ではなかった。



黒伏山南壁凹角ルート…ハングを登る古山

3ピッチ目、ハングの乗っ越しである。張り出しは3m位であろうか。左斜上に越していく。技術的体力的には何ら問題となるものではなく、このハングも快適そのものであった。ハング上で2ピッチ目に分かれたルートと合流するが、ビレー地点に迷い、一部変則的な登攀をする。

4ピッチ目、ブッシュに挟まれた岩を登るが、冬に打たれたのだろうか、必要以上のハーケンボルトが目につく。たしかに夏の核心部が冬の核心部になるわけではない。夏は、なんていう所ではないのに冬はすごく悪くなるものである。きっとここも冬は悪いのであろう。

この上は傾斜が幾分落ち、A1のピッチが1ピッチあるのだが、時間も時間だしここで終了とする。懸垂3ピッチで取付きに降りたが、なかなかスリルのある懸垂であった。

下山路は昔の記憶を頼りに、別な道をとるがこれが失敗で、延々と長い道を歩かされる羽目になってしまう。なんと自分の記憶の不確実なことか、自分

で自分に呆れてしまう。

帰路48号線に出ると、思ったより道路が空いているように見えた。GSのおじさんも今日の交通量は多くないという。少しでも高速代を浮かそうと色気を出し、山形北から乗る予定を仙台宮城に変更したのが大失敗で、大渋滞にはまり込んでしまった。古山は出身大学が仙台だったので付近の道路には詳しく、それがだめならこっちの道、これがだめならあっちの道と移動するが、結果はすべて裏目で、ますます深みにはまり込んで行く。そのうち古山は「アァ〜、も〜だめだ」などと言い出す始末。2人共“も〜、ど〜にでもなれ”と完全に諦めの心境になっていた。やっと高速に乗り、矢板で料金を払ったら何とたった200円位の違いしかなかったというお粗末で最後を飾りました。

車発(7:46)ー取付(8:32~9:29)ー4ピッチ登り懸垂ー取付(14:32)

(本図 記)

清津川・釜川右俣

1996. 10. 12

パーティ L澤田仁、高木博行

紅葉の美しいこの季節、高木さんと沢にいくことになった。目的地は釜川右俣。僕がかねてからこの沢にある三ツ釜の大滝を見てみたかったのだ。

出発は10月11日の夜。途中、国道が道路工事で通行止めだったので、通行が解除される午前5時まで道路脇の駐車場で仮眠をとる。12日の早朝、釜川林道へ。釜川林道も工事をしており、一般登山者立入禁止の看板があったがあまり気にしなかった。しかし、林道終点の工事現場を通る際、工事業者数人にかなりきつい口調で呼び止められた。『おい、こらっ待て』。『お前ら、立入禁止の看板が読めんのか』。『われらは建設省のお墨付きをもらってここで工事してんだ。帰れ、帰れ』。ここまで来て追い払われたのではたまらないので、こっちはひたすら平身低頭で『すいません。ちょっと脇から通してもらえませんか』。と頼みこんで、なんとか通過することができた。たしかに立入禁止の立て看板を無視した我々も善くないが、あんな偉ぶった、意地悪な態度には大変腹が立った。特に、自分に権威がないものだから建設省の権威を利用するような、虎の威を借る狐的な言葉は鼻持ちならなかった。僕の友人で建設省の役人になって業者をアゴでこき使っている奴がいるが、初めて彼をうらやましいと思った。

工事業者の悪口はこれぐらいにしておいて、何はともあれ我々は入沢に成功した。すぐに核心部。ゴ

ルジュの中にトロと釜が連続する。一ヶ所、巻き道からの下りるところで崩壊している部分があり、懸垂下降した。トロ20mは泳いで突破。水流はそれほど強くないが、とにかく水が冷たい。すぐそばの苗場スキー場がこの2週間後にオープンしたのを考えれば当然だが。11時半に三ツ釜の大滝。ここは三俣になっていて、それぞれが滝と釜を持ち寄り、大きな庭園のようになっている。釜にたたえられた水が青々として大変美しい。ここで昼食を取る。この後は滝と釜が断続的に現れたが、特に困難なところはなかった。しかし、腰までの徒渉や数mの泳ぎが幾つかあり、その度にガチガチ震える有様だった。清水沢合点を14:10に通過し、15:15に林道横断地点に到着した。この橋の下でビバークして翌日上流へ行く予定だったが、天気が悪くなりそうだったので、この日のうちに林道から下山することにした。日没まで時間があるので、高木さんが持ってきた釣り道具でイワナを釣ることにした。しかし、釣れるのは小物ばかり。林道より上には大きな釜やトロがなくて、大きなものが生息できないためらしい。日没後、雨が降り始め、ずぶ濡れになりながら真っ暗な林道をとぼとぼ歩いて車まで戻った。

(澤田 記)

赤城山（黒檜山）& 榛名山（榛名富士）

1996. 10. 13

パーティ L 古山正文、本図一統

ここで皆さんに公表しておくが、古山は隠れ百名山ハンターである。『僕は百名山はやっていない』と言っているが、それはウソである。断っておくが、私は決して百名山ハンターではない。どうせ百を狙うなら百名谷を狙いたいが到底無理な事。低山でもヤブ山でも有名山でも私は好きだから、百名山はもう少し齢をとってから行きたいと思っている。それもバリエーションルートか積雪期に限定したい。数えてみたら既に51山登っていた。その中で一般ルートからは6山、あとは全てバリエーションか積雪期である。そんな私がなぜ赤城山と榛名山に行くことになったかと言えば、この日は谷川岳の予定であった。下館に7~8名集合したが、天気悪く中止と相成ったのである。そこで急遽この山行が生まれたわけ。どちらが誘ったかと言えば私の方である。古山は“行きたくないけど付き合うか”みたいな顔をしていたが、心の中では嬉しくてしょうがなかった表情を私は見逃さなかった。ぜったい古山は百名山ハンターであり、アルパインクライマーではない。ちなみに私もアルパインクライマーではない。アルパインスイマーである。文句あつか？。

何も書くべきことがないので、コースタイムのみを記す。

黒檜山

車発(8:34) - 黒檜山頂上(9:22~9:32) -
駒ヶ岳(10:00~10:06) - 車道(10:29) - 車着(10:42)

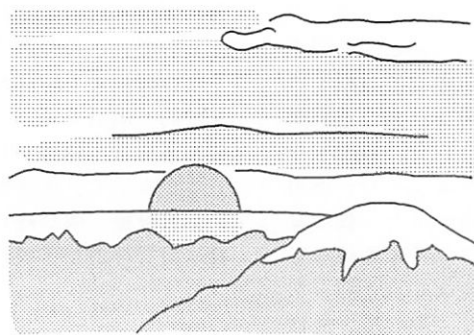
榛名富士

車発(12:26) - 榛名富士頂上(12:52~13:00) -
車着(13:16)

(本図 記)



黒檜山山頂にての古山



山岳救助訓練山行

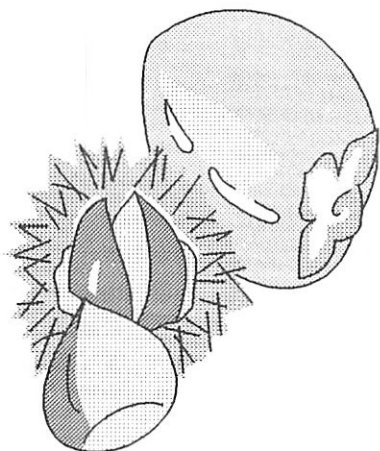
1996. 10. 27

パーティ L 古山正文、本図一統、木村一、笹沢ひろみ、鈴木操、今井弘、告広道、今村宏
笹平孝、新美達也、紺野哲雄、高木博行、菊池光夫

今日は10月の例会山行である。遭難救助訓練山行を栃木県の岩舟にある藤坂ロックガーデンで
する。いつもの様に土曜日の夜、いつもの様に下
館の市役所へ集合する。会山行なので参加人数が
多く、総勢13名が集まり車3台に分乗する。内
1台は先発隊として現地に行き、テント2張を張
って置く。リーダーの古山氏が率いる1班と本図
氏が率いる2班とに分けてそれぞれがテント内で
テキストによる講習会を行う事約2時間くらい特
訓する。その後軽く酒を飲み、明日にそなえた。
練習場はみかも公園より車で約20~30分の所
にあり、車を駐車して歩くこと5分位で行ける岩
場です。他のクライマーは居なく、今日一日はA
CC-J 茨城御一行様が岩場を一日貸切りです。
岩場でもパーティを1班2班に分けて訓練する。
午前中にバッチマン結びやシートペント結び及び

流動分散の支点の取り方やエイトペント、半マス
ト結び、カラビナ使用と8環使用と2通りを覚え
る。ブルージック登攀と一人一人が交代に全員が
マスターする様に繰り返し繰り返し練習する。当
会の新人はみんな頭がいいのか覚えが早い。特に
告、紺野、今村、新美、澤田、高木と有能な新人
が居て頼もしい限りである。午後は岩場を少し変
えて一番左側の上部の岩場でプルダウンシステム
の練習を行う。さらしを使用してけが人の救出方
法などを夕方まで全員練習し、実力をつけて家路
へと向かう。ところで、何の実力がついたんだと
木村氏が尋ねた。決ってべよ木村さんと菊池が答
えた。

(菊池 記)



明星山P6南壁左フェースルート

1996. 11. 3

パーティ L 武藤泰宏（水戸葵山岳会）、本図一統

2日夕から夜にかけて、古山、告、生井、私の4名は2台の車に分乗して明星山に向かう。それは、私が4日に近所の結婚式に出なければならないので、3日夜に帰るからである。古山と告は前日出る筈であったが、現地で雨ということで今日夕刻一足先に出発していった。水戸葵の3名とは現地で落ち合う予定である。南壁対岸の駐車場に当会のテントを見つけ一杯やって寝る。

3日早朝、首尾よく水戸葵と会うことができた。今日は古山、告、生井は左岩稜ルート。武藤氏、秋元氏、古谷氏、私はフリースピリッツかクワトロに行く予定でテントを出る。小滝川は今の時期だと転石伝いに徒渉できるのだが、昨日までの雨で増水しており、靴を履いたままジャブジャブと渡る。フリースピリッツを見上げると既に大渋滞が発生しており、これから取り付いてもとても抜けられまい。クワトロはというと、昨日までの雨で濡れており、いやらしそうに見える。先程から1パーティ取り付いているが全く動かない。同じ所を行ったり来たり、

踏ん切りがつかないようだ。ACC-Jルートにも2パーティ取り付いている。このパーティは順調に登っている。そのうち2人組がやって来て、いまからACC-Jルートを登るんだという。その時思ったけど、自分達が作ったルートを登ってくれるのは非常に嬉しく感じるものなのだ。ルートというものは無形のものであるが、なにか自分の子供のように可愛く感じてしまうのだ。できればそばに行って“ACC-Jルートを登ってくれてありがとう”と握手を求めたい心境である。今のフリークライミング全盛の時代に、人工主体のルートなど登る人はいないと思っていたのだが。昔登ったルートなんか殆ど忘れてしまっていることが多いのに、ACC-Jルートだけは鮮明に覚えている。何回も登り降りしたせいもあるが、それだけこのルートには私の青春がある。それだけ情熱をかけたのだ。でも完登された時、私は海外登山で日本を留守にしているメンバーに入れず、今でも少々悔しい思いが残っているのも事実なのだ。

我々は時間も遅くなり、正面壁は今日中にぬけられそうもないので左フェースに転進することにする。取付に行くとき古山パーティは、まだ1ピッチ上のテラスで順番待ちをしていた。左フェースルートも登ったことがあるのでルートファインディングは問題ない。このルートは南壁の初登ルートで、初登攀争いのドラマを思い出し、いまさらながら、この傾斜の強い壁に、よくこれだけ見事な弱点を捜し出したと感心する。左フェースには先行がいなかったので先に行かせてもらう。秋元氏と古谷氏、武藤氏と私の2パーティに分かれて登攀開始。武藤氏とザイルを結ぶのは2回目である。ツルベで登って行くと先行パーティが居て追いついてしまう。このパーティは登るのがとても遅く、だいぶ待たされる。さらに直上ルートに入ってしまった。終了点は同じなので我々もそれを行く。どこを登って来たのかは知らないが、となりに現れたパーティは一抱えもあるような石をバンバン落す。河原にいる人は生きた心地がしないだろう（もっとも、この時間に河原にいる奴もバカではあるが）。いいかげんにしたらと言いたいが、本人は登るのに精一杯で、浮石まで気が回らないんだから、しかたがないのかも知れない。確か

に石灰岩は慣れないと怖いであろう。終了点上の凹角は、何回も登ったことがあるのに何処がルートか忘れてしまった。結果は我々は右を登ったが左の方が良かった。秋元氏、古谷氏を待ち登攀用具をしまう。さらに古山パーティを待つが、これ以上待つと暗くなってしまうので、チョークで下降ルート方向へ矢印を書いて西面を降りる。

ベースに着くと告の車がないので、糸魚川まで買い出しに行ったことが想像ついた。心配していたが無事降りていることがわかって安心した。水戸葵も買い出しに行き、武藤氏と二人で車の中で帰りを待つ。武藤氏とは滝沢リッジで初めて出会い、両パーティ共（その時、彼は単独）ドーム下でビバークした。翌日、我々は寝坊してしまったが、彼は「本図さん、まだ寝てんの～」と声を掛けてくれた。天気にも恵まれ相前後して完登した。その時の印象がとても強く残り、後日に登攀中の彼の写真を送った。その後、かみさんをヨーロッパアルプスに連れて行ってもらったり、私とも数回山行を共にした。彼とザイルを結ぶなんて思ってもいなかった。山での出会いは縁でもあり、いいものである。

全員そろってから宴会を始めるも、私はこれから

帰らなければならず、あまり飲めなかったのは残念であった。宴会もだいぶ盛り上がった9時過ぎ、全員の見送りを受け1人寂しく帰路につく。

大町経由で高速代を浮かそうとしたが、大町方面は工事のため夜間通行止めであった。今思えばこの

工事現場が、あの14人を犠牲にした小谷村の土石流発生現場だったのであ

(本図 記)

明星山P6南壁左岩稜

1996. 11. 3

パーティ L 古山正文、告広道、生井一男

風の便りで何やら11月に明星山に行くとの噂が私の耳に届いた。私もまた良からぬ虫が湧いてきてあわよくばACC-J直登ルートに登ってしまおうと、その噂の真意を確かめるべく本図さんにTELした。するとメンバーは古山、告、本図の3名との事であり、本図さんは仕事の都合で彼らとは一緒に行くことは出来ないで、一人で行くのにどうしようかと思っていたとの事。それじゃ、渡りに船だ。と同行を願うが、本図さんは水戸葵山岳会の武藤さん等と登るとの事でザイルパートナーになれないが、先発隊と合流後ルート決めれば良いと明星山に行くことにした。

11月2日。いつものように下館の駐車場で本図さんと午後8時に落ち合い、明星山を目指して車を

走らせる。車中での話では古山さんと告は2時間前の6時頃、茨城を出発したとの事で、本来なら前日発だったのだが天気が良くないので1日ずらし我々より先に行ってテントを設営して置くという話だった(本当は早く行って少しでも寝たいのだろう)。

南壁の見える駐車場につきテントを探す。ACC-Jのテントは見つかったのだが、水戸葵山岳会(武藤氏)のテントが見つからない。テントのフライの張り方が、どうも武藤氏らしいと本図さんがいうテントを見つけるが、今一確証が無い。車もナンバーが土浦ではないし……?。朝になれば判るだろうと早速テントで小宴を行ない、そして就寝した。

翌朝、外はあまり良い天気ではない。ガスっていてちょっと迷ってしまう天気だった。ともかく朝飯

を食って準備をしようとなる。するとやはり怪しかったテントより武藤さんが出てきた。『やっぱり武藤さんのテントでしたか。フライの張り方がどうも武藤氏らしいかったんでねえ…。』と本図さんが話しかけた。本図さんもこれで登攀パートナーと合流できた訳です。めでたしめでたしという事で朝食後、古山、告、生井の三人で左岩稜に7時過ぎに向かう。本図さんは、葵山岳会の人達と登るという事で我々が先にテントを出発した。左岩稜に取り付くにはまず、小滝川の渡渉がある。川原まで下りると水量がかなり多い。渡渉ポイントを下流に上流にと探すなかなか良いところが無い。左岩稜の取り付きにはもう2~3パーティが集まっていた。急がねばと気は焦るが、あるパーティみたいに下半身腰まで漬かって渡渉する気はない。よく見ると腰まで漬かったおじさんが、連れのねーちゃんを負担ってまた渡渉している。「ついでだから俺もおんぶしてくれよう」と恨めしそうに見ていた。ウダウダしていても仕方ない覚悟を決めて、告が偵察してきた上流よりパンツ一枚になり渡渉する。『ひゃー! 冷たいよう! 足が凍りついちゃうよう!』と騒ぎながら上陸し身仕度

を整え、何事も無かったように取り付きに到着。先行がいるので、しばらくは待機状態である。対岸を見るとまだ数パーティが渡渉を考えている。天気も良くなってきた。待ち時間で昼寝をしたい陽気だ。左岩稜の出だしはちょっとかぶっていて大変そうに見えたが、俺にとっちゃ何てことはないなあと思いの怠慢な生活をしていたのも忘れ、そう思って先行の登りを見ていた。

ようやく我々の番が来た。まずトップに行くのは、飛ぶ鳥を落とす勢いのピチピチの当会の若大将こと告が行く。難なく登りビレー体制に入った。セカンドは私、生井が行く。が、かぶっている所でもたついてしまった。頭の中では簡単だと思っていたのだが、体がいうことを聞いてくれない。どうなっちゃんだよ俺の体はと思いつつ、手を伸ばしホールドを掴み体を引き上げるが、地球の重力は無情に俺の体を思いっきり下に引っ張り、無惨にも落っこちてしまった。どうなってんだ!。『人に登れて、俺に登れねえ訳あんめえ』と再度トライするも体が思うように動かない。傍から見ればまるでカメレオンの様な登りだったろう。モタモタしていたら下の川原が

ら『生井！何やってんだぁ！ビシッと登れ！』と楯が飛ぶ。誰かと思えば、彼の本図御大ではないか。どこを渡渉して来たのか判らないが、全く何時も神出鬼没な登場である。さっさとここを登らなきゃ何ねえぞ、と気合いを入れる。本図さんの声に体が条件反射の様に反応してしまう。まるでバドロフの犬のようである自分が情けない。ともかく気合いを入れてどうにか登り切った。ようやく登り切ったビレ一点で一休みしていると、早速、葵山岳会&本図さんパーティが登ってきた。トップは葵の若手。俺も10年若けりゃ、決して彼らに負けないんだけどねと彼の雄姿を見ていた。続いてもう一人の若手、そして本図さん、武藤さんと登ってきた。そして我々が古山さんも登ってきた。ここで彼らに先に行ってもらおうが左岩稜は先行がいて混んでいるので葵山岳会&本図さんパーティは、左フェースルートにルートを変更してとっとと行ってしまった。全く、海千山人達にかかなわないなあと、驚くやら呆れるやらとしばらく彼らの登りを観賞していた。

我々の先行もどうにか動いたようで、2ピッチ目、また告がトップで行く。シビヤなフェースを登り切りテラスに出た。続いて生井、古山と登って行く。

帰りは渡渉するも嫌になったので導水管までブッシュの中をトラバースしてを導水管渡って対岸に着いた。あとはテントのある駐車場まで戻った。

テントにはまだ本図さん等は帰っていなかった。南壁の対岸に設けられてある見晴らし台から『もつつさぁん』とコールするが返答はない。備え付けてある望遠鏡で探してみるが見当たらない。もう下降しているのだろうか？、まあ、彼等のことだから心配は無いと、夕飯と酒のつまみを買出しに出かける事にした。

買出しから帰ると、テントには本図さん等が戻っていた。ACC-J茨城のテントで葵山岳会の人を呼び、今日の登攀の事や雑談などで話が弾み楽しい親睦会になった。その後各々のテントに戻り就寝した。

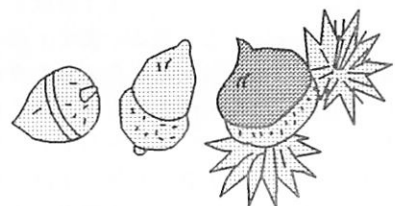
我々のテントには古山、生井、告の3名である。本図さんは、9時頃一人寂しく帰っていった。テントの中で明日の登攀の打ち合わせを行なった。明日帰るという日程なので、ACC-J直登ルートの完登は無理だし、下降ルートもよく判らないだろうと今回はやめて、また左岩稜に行こうと話がまとまらなかったが、告がどうしてもACC-J直登ルートに行きたいと駄々をこねる。『ACC-J直登ルート

私はフェース側から、古山さんは凹角側から登る。私の方はシビヤな登りで細かいホールドでバランスを保ちながらジリジリと這い上がる。そして告のいるテラスに着いた。続いて古山さんも到着。この次のピッチは人工である。かぶり気味の垂壁からハングを抜けテラスに達するのだが先行がなかなか抜けないでいる。先もかなり詰まっているようだ。ハング下で壁にへばり着いている先行のラストを見ながら、煙草をふかしたり下の川の対岸を見たりで退屈である。とにかく先行のあぶみが動かない。セミじゃ無いんだからそんなに止まっていなかったていいからはよ行けよ！、と思いながら待つ。

そして漸くして先行のラストがテラスに抜けたので、またもや告のリードでハングを行く。しかし先行がテラスでもたついている。上に行っても我々が3人が集まることは出来ないらしい。どうする？時間も無くなってきた？。う～ん？？？。お昼もとうに過ぎたし、これじゃ登攀終了して下降したら夜になってしまう。仕方ない。ここでリタイヤしようと古山さんと相談後、申し訳ないが告にあぶみでクライムダウンしてもらい懸垂下降して取り付きまで戻った。

じゃなけりゃ、僕は行きません。2人で行って来て下さい。』と、とうとう告がいじけてしまった。すっかり拗ねてしまって一人シュラフに包まって寝てしまった。仕方無い。明日は私と古山さんとまた左岩稜にアタックする事にして、告はテントで居残りである。明日の天気の良い転を期待して床に就いた。

(生井 記)



明星山南壁ACC-J直登ルート（中退）

1996. 11. 4

パーティ L 古山正文、生井一男

朝食後、7時過ぎには古山さんと私は南壁に向かった。私は導水管から古山さんは渡渉して左岩稜の取り付きに到着したが、取り付きにはすごい人の数、これでは昨日の方がまだましであった。仕方ないので違うルートに変更しようとなり、空いているルートは無いかと川辺を歩き清水RCCルート、直上ルート、正面壁ルート、柴田ルート、フリー・スピリッツルート、ダイレクトルート、と岩小屋の所まで様子を見たが、かなりのパーティが取り付いていた。しかし、何故かACC-J直登ルートには人がいない。どうぞ登ってくださいと言っているように……。じゃ、ACC-J直登ルートを行ける所まで行こうやと話がまとまり、早速、私がトップで出る。まずは左上気味のバンドまで5mぐらい登り、そのバンドの中央部辺りから直上する。ここはまだ簡単なものである。凹角部の手前でピッチを切り、古山さんに上がってもらおう。2ピッチ目は古山さんが行く。ちょっといやらしいフリーから凹角部を人工で抜け、後はぐんぐんとザイルを伸ばしている。しばらくし

てコールがあり、私が登る。出だしのフリーから人工につなぐのだが、フリーが本当にいやしかった。さすが古山大先生。よくそこをトップで行きなすった、と感心しながら人工に移行。人工になれば後はあぶみの掛け代えなので楽である。後は鼻歌交じりにテラスに着き、そのまま3ピッチ目に行く。人工は楽しい。何せあぶみの掛け代えだけで登れるのだから。私は背丈が高くないので常に最上段に登っていたが、傾斜があまり無いので、常に安定して登れた。そんなこんなでカンテの手前のテラスに到達。古山さんにコールし上がってきてもらう。またそのまま古山さんがトップでいく。カンテ手前を人工で軽快に登り、カンテに取り付きカンテを乗り越えそうとした時、『もしかしたら落ちるかも知れませんから、お願いします』と声があり、私も何時でもこいという体制をしたと思ったらいきなりザイルに衝撃がかかり、エイトカンが上に跳ね返った。と、同時に古山さんが7～8m空中をブッ飛んできた。隣のルートからは『わおお～！』との声。古山さんはザ

イルにぶら下がり大丈夫のようだ。一応テラスまで下ろして体をチェックする。

古山さんの話では、ナッツをかませてそれを支点にちょっと使い、上のボルトにあぶみを掛けようと思ったのだが、ナッツのききに今一不安だったので落ちるかも知れないとコールしておいたと言う。よく見るとハーケンが一枚ザイルに着いている。ハーケンも墜落の衝撃で抜けてしまったらしい。とにかくこまめにランナーをとっていたので良かった。

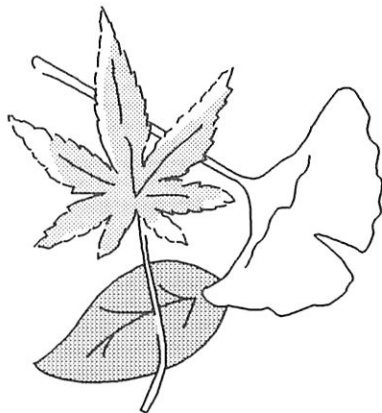
古山さんの体に損傷は無いようだが、どうも昔打った足首が痛むらしい。時間的にも今回はここで敗退することにし、壁に掛かったままのランナーを回収に私が行く。回収後、懸垂2回で下の岩小屋に到着。

水かさも減った小滝川を渡渉して見晴らし台の車道までゆっくり登った。登っていてやはりどうも腰の状態があまり良くない。どうやらまた再発してしまったらしい。本当のところ今回の山行は、あるところへ行く為に体の具合をみたくて来たんだが、これでは折角の予約もキャンセルしなければならぬ。仕方ないなあ等と考えながら古山さんより遅れて見晴らし台のところまで登りついた。登り切った

所でちょうど告が来ていた。テントをたたんで車を回しておいてくれた。気が利く奴である。

着替えをして残念だった今回の山行を振り返りながら帰途に就いた。

（生井 記）



松木沢ウメコバ尾根末端壁直上ルート

1996. 11. 10

パーティ L 本図一統、今村宏

前の日の夜、本図さんお得意のカギあけでゲート
を通過し、ウメコバ沢のすぐそばで車中泊した。朝、
明るくなって初めてまわりの風景を見て驚いた。木
が1本も無い。学校の社会の時間に足尾銅山鉱毒事
件のことは習ったが、今でもこんなにひどいとは思
わなかった。準備をして、出発したのは8:07だ
った。ウメコバ尾根の取り付きはほんの数百メー
トル先でほとんど歩かなくていいなと思っていたら、
車が近づいてきて『おまえたち、どこから入ってき
た。』と工事関係者に怒られ、車に乗りゲートの外
まで戻ることになった。車で行けばすぐなのだが、
歩いたら結構時間がかかった。結局ウメコバ尾根を
登り始めたのは9:50だった。難しいところは本
図さんがトップになり、簡単な所を僕がトップにな
って登っていった。ちょうど難しい場所と簡単な所
が交互にでてきたので、僕がトップを行った所は歩
いて登れるような所だった。岩がごつごつしていた
し、クラックも多かったのでホールドする場所が無
くて困るということではなかったが、たまにホールド

してた所が、ポロッととれたり、またガレ場が多か
ったので落石は多かった。僕がトップで登っていた
ときだが、3mぐらいの岩壁をよじ登っていたら右
手に14インチのテレビ位の岩がゴロンと転がって
きて挟まれてしまった。手をひっこ抜こうとしても
抜けず、左手は岩を握っていて放せないし、頭で岩
を押しても動かなかった。ちょうど体の上に岩があ
ったので、左手を動かして岩が落ちてきたらまとも
に体で当たって岩と一緒に落ちてしまう。途中はガ
レ場だったので1つもヌンチャクなど使っていない。
岩が落ちたら僕自身も20m以上は落ちてしまう。
いろいろ考えた末、足2本でバランスをとり、右手
を離して左手の岩を押し上げて左手を岩の下から引
き抜くことにした。岩も落ちてこなくて、何とか左
手を抜くことができた。その後も登っていったが恐
怖心が残ってしまっていて、なかなか思うように登れな
かった。登はん終了が13:11で13ピッチあつ
た。頂上までは登らなかった。上でちょっと休憩し
た後、13:38に下降を始めた。ほとんど懸垂下

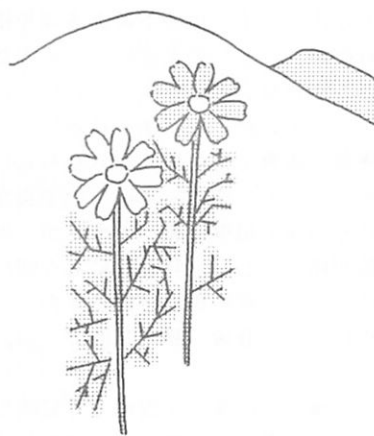
降で下りて行っただが、僕は慣れてなくて左右にふら
れながら下りて行っただ。工事現場に着いたのは15
:16で、そこからまた車まで歩いて行っただ。途中
鹿が川を渡っているのを見た。車に着いたのは16
:00だった。朝、工事現場の人に見つからなければ、
2時間は早く着いていただろう。今まで練習で
岩登りをしたことあったが山に登って下りてきたの
は初めてだったので、とてもためになったと思う。
また公害で丸裸にされた山を見て一度壊れた自然は
簡単には戻らないのだなと痛感した。

取り付き(9:50)ー終了(13:11)ーP1(13:38)

ーウメコバ沢(14:57)ー松木沢(15:16)

ー車止め(16:02)

(今村 記)



西上州・毛無岩

1996. 11. 17

パーティ L 本図一統、坂本恵美子、高木博行

今回の山行は毛無岩。ユニークな山名だが地図を探すと妙義山や荒船山のすぐ近くで、この時までこの山域の岩質を知らない私は、ゲップ出るほどクライミングが楽しめるものと期待していた。前夜、道路の車止めに酒を呑みながら、坂本さんの百名山の話で盛り上がる。

翌日は雲一つ無い好天。沢を渡り返しながら登ると踏み跡を見失うが、所々木の枝に布がついている。沢を離れる様になると道ははっきりしてくる。しばらくして荒船東稜上の稜線に出る。ここからは妙義山や浅間山が遠望でき、一息入れるには良いところだ。やがて毛無岩基部に着くがザイルが必要な所など無く立派な登山道が岩稜に着けられていた。基部から10分ほどで展望の良い頂上に着く。頂上右側が断崖になっておりボルトが2本打たれていた。岩が脆いのでテラスまで懸垂し、トップロープで登るのだろうか？頂上で本図さんがコーヒーを入れてくれ、あとから来た元気のいい中年登山隊と暫し雑談をする。下山途中、小さな岩場で三点支持や懸垂下降の練習をする。

下山は途中から右に沢を見ながら下るのが、ときより岩魚が走る。下山後、本図さんが周辺の

岩場を偵察。鹿岳など立派な岩山でクライミングの対象になれば素晴らしいのに、この周辺の岩場は岩が脆いらしい。西上州の山々は眺めるには中国の水墨画にあるような素晴らしい山々でした

車発(8:11)ー相沢越え(9:29)ー毛無岩山頂(10:17~10:38)ー途中の岩場で岩トレ(11:14~13:26)ー車着(14:30)

(高木 記)



毛無岩頂上にて

冬山訓練 荒沢岳（Aパーティ）

1996. 11. 23~24

パーティ L 笹平孝、澤田仁

下館を出発して銀山平へと向かった。インターを降りてからしばらく行くと結構長いトンネルがあって、このトンネルを出た所に銀山平がある。ここまで来ると雪も少し積もっていて寒く感じた。実は7月に旅行でここに来た事があった。その時は、このへんの山は気にしていなかったの、実際に登るとは思ってもいなかった。朝、起きると昨日の降っていた雪もやんで晴れていた。登山口からすぐに急登となって、汗を流しながら登って行った。ピークまで来ると今までの急登もなくなって稜線を進んで行く。いくつかのピークを越えようとクサリ場の所に出る。ここで準備をして、クサリ場を慎重に登って行くと雪稜に出る。しばらく進むと行き止まりになったので、左下に一度下りて、ここからロープを出して雪壁を登った。ブッシュに支点を取りながら4ピッチほどで雪稜に出た。時間も結構だったので少し進んだ所にツエ

ルトを張った。次の日の朝も晴れていた。余計な荷物を置いて荒沢岳へ向かった。眺めのいい雪稜を登って行くとやがて分岐に出て、右側の痩せ尾根の所を登って行くと荒沢岳山頂に着いた。そこで、回りの山を見たり聞いたりしながら越後の山もなかなかいいなあと思った。時間も余り無かったので、少し休んでから下り始めた。今回は、雪がまだ少ない時期だったので登りやすかったと思った。

11/23

駐車場(9:15)ー前ぐら尾根取り付き(12:00)

ーテント場(16:00)

11/24

テント場(7:30)ー荒沢岳(9:40)ーテント場(10:50)

ー駐車場(15:50)

(笹平 記)

荒沢岳前ぐら尾根（Bパーティ）

1996. 11. 23~24

パーティ L 告広道、本図一統、今村宏

今回の山行でもまたゲロを吐いてしまった。山でビバーク中にアルコールを飲むと必ず酔って動けなくなる。『ああ、早くテント張って早くビール飲みたいな。』と言う人がうちの会にはたくさんいるが、はっきり言って信じられない。やっぱりテントに入ったら温かいコーヒーが飲みたい。山行中はこんなに下戸な自分だが、街で若いお姉さんのいる店にでも行くと結構いける口になる。自分自身の事なのに不思議ではない。自分もそうだがたまに酒の話をしていると、『ビールは駄目だけどウィスキーなら飲めるよ。』と聞くとがビールはアルコール約5%ウィスキーなら5倍に薄めたとしても約9%のアルコール度がある。体に対する影響を考えるとウィスキーの方が高いような気がする。それで思ったのが酒が飲めないのは精神的影響が原因ではないのかと。自分も学生の時に、やれ歓迎会だ、打ち上げだと先輩に連れられ酒を飲みに行った。学生の時といえば金が無いのでだいたい安ビールになる。まだアルコールに体が慣れてない時期なので飲めば必ず吐く。学生といえば先輩の言うことは絶対なので、やれ

醤油入りのビールだの、からしが入ったのだの、挙げ句の果てにはかぜ薬クララの入った緑色のビールを飲まされたこともあった。そして必ず吐いた。そういう思いをしたことが心の奥の方に眠っていて酒を飲むときになると体が拒絶反応をおこしてしまうのではないかと。それに対して、ウィスキーといえば高価な物だったので、当然手にはいれればちびちびやることになる。吐くまで飲むことは滅多にない。ウィスキーのイメージはクリーンである。頭痛にしてもそうである。最近分かってきた事だけど標高2000mもしくは行動時間7時間を越えると頭痛薬のお世話にならないといけなくなる。最近某テレビ局の番組で『頭痛の半分は気の持ちようだ。』と言っていたが、たしかにそうかなと思える節がある。なぜかというところある山に限って言えば、頭痛にならない山があるからである。ひょっとしたら自覚してないが、山の大きさ、深さに飲まれているのかな。

23日

登山口(9:23)ー前グラ取付(12:37)ー
前グラ終了(16:00)ービバーク地(16:21)

24日

ビバーク地(6:53)ー荒沢岳頂上(9:41~9:51)ービバ
ーク地(10:53~11:25)ー登山口(15:54)

(告 記)



荒沢岳頂上にて

冬山訓練・荒沢岳前ぐら尾根(Cパーティ)

1996. 11. 23~24

パーティ L古山正文、紺野哲夫、新美達也

冬合宿の為の冬山訓練ということで荒沢岳に来た。私は今回が初めての雪山なのでヤッケ、シュラフ、アイゼン、等々新品をそろえて参加した。金曜の夜に下館を出発して、銀山平に到着、そこでテントを張って寝る。1100gの羽毛シュラフはさすがに保温力抜群で、途中で暑くなって半分体を出して寝た。

翌日3パーティに分かれて出発する。登山口周辺には雪はなかったが30分位で膝くらいまでの積雪となる。最初はかなりの急坂。歩き方が解らない私は汗をかきながら歩いて古山さんに注意される。それにしても50cm位の積雪でもかなり歩くのが疲れる。本番のラッセルはさぞかし疲れるのだろうと予想される。途中でなかなか稜線に出たところで輪かんを付けて歩く練習などしているうちに鎖場にでる。ここで3パーティ合流。登攀具とアイゼンをつけるが、どうも私のアイゼン

は他の人のとちょっと違うようだ。プラスチック靴と革靴の両方に対応できるようになっているのがっちり固定されず、「激しく使うとずれるんじゃないか？」との意見。この事は冬合宿で実証されてしまった。コージツつくば店で買い物をするのはやめよう。それはともかく、鎖場の後も何カ所か小さな岩場が出てきてアイゼンを使い慣れていない私は結構緊張する。途中で尾根伝いの道がとぎれて中荒沢側におりてそこから再び尾根に取り付く。古山さんがトップで登り、後続が固定ザイルにカラビナを懸けて登る。私は登り方が今一つわからず不必要にロープにつかまってしまい時間をかけてしまう。2ピッチザイルを伸ばして尾根に再び登り返したところで15時過ぎになったので、稜線上の樹林帯にツエルトを張る。その後、食事/酒。古山さんがハイテンションになってきたので、「いつぞやの再現か？」と期待した

がそこまではいかず就寝。風もなく暖かいので全く寒さを感じない。羽毛シュラフも宝の持ち腐れ状態であった。

翌日は尾根を忠実に歩いて山頂に向かう。特に危険な場所はない。荒沢岳は今まで聞いたこともなかったが、稜線から眺める山頂はとても美しく、威厳があって感動した。本図さん、告さん、今村さんグループがトップで出発してラッセル、途中で我々のグループが交代してラッセルした。所々腰くらいまでの積雪で結構疲れた。最後の登りを笹平さん、澤田さんパーティがトップで登って山頂に着いた。快晴無風で展望も良くまるで春山のように快適。冬合宿もこれくらい暖かならなあと思ってしまう。このまま長居したかったが、あまり時間に余裕がなかったのでそのまま下山する。途中4ピッチほど懸垂下降してなだらかな稜線ま

でもどる。こちらへんは一日でずいぶん雪が溶けていた。途中まで菊池さんと木村さんが迎えに来てくださった。なんでもスキー場がまだ雪不足で滑れないとのことだった。

初めての雪山でだったが、好天とぽかぽか陽気と風なし状態に恵まれて快適だった。きっと冬合宿はこうはいかないのだろうけれど、冬山の素晴らしさを少しは実感できたような気がする。

一日目

銀山平(8:00)ー前ぐら取り付き(鎖場)(11:00)

ー前ぐら終了(15:00)ービバーク地(15:30)

二日目

ビバーク地(7:30)ー荒沢岳山頂(10:00-10:40)ー

銀山平(15:00)

(新美 記)

ナーゲル祭 “筑波ふれあいの里にて”

1996. 11. 30~12. 1

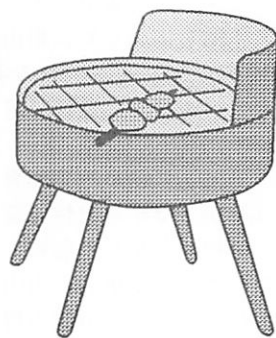
参加者 本図一統、木村一、菊地光夫、鯉河仁志、中島淳、生井一男、笹沢ひろみ、古山正文
告広道、笹平孝、高木博行、新美達也、今村宏、坂本恵美子、栗原孝、以上茨城
水島、名雪、金沢、吉田、阿部、松原、矢竹、仲川、以上東京

山にあまり行かなくなると昔の山の仲間と酒でも一杯などと考えるのは、私だけであろうか。会の祭りであるナーゲル祭も、ここ何年か開催されず、私のような者にとっては、寂しい限りである。しかし山の会は山行を最優先に考えるが一番に、私も常々思っているのでナーゲル祭を開催してくれなどとなかなか言い出せなかった。

今回のナーゲル祭は、筑波山中腹の貸し別荘で行われた。当日は古山リーダーを中心に若手が昼間から買い出しや料理と頑張ってくれた。参加者は東京を含め22名となった。私は中島君と7時に会場に着く。部屋に入るともう宴会が始まっており、東京の水島氏や名雪氏、金沢氏、吉田氏などめったにお目にかかれない大先輩が来てくれており懐かしい気分になる。参加者全員がそろったところでACC-Jの創設者の1人である水島氏に挨拶をしてもらう。大親分の風格を感じさせる水島氏であった。宴も進みアルコールも回りだした頃に、今回も前回同様に、ニセ神主が出現した。山の七つ道具を供えた神前に全員を整列させ、神主が山での安全を願い祝詞をあげ1人1人をお祓し、おまけに名前が入ったお札までいただき、全員ニコニコであった。神主も家でだいぶ練習したのか前回よりも本物に近づいたような気がした。

あと何年かすると新興宗教でも始めると言い出すと大変だ。その後ナーゲル祭は夜が更けるまで酒を飲みながら話が弾んだ。

(鯉河 記)



蓼科山

1996. 12. 8

パーティ L 古山正文、本図一統、坂本恵美子

蓼科山は八ヶ岳連峰の北端にあり、その円く形の整った山頂はどの登山口からも2、3時間で登れる気軽さがある。最初に蓼科山に来たのは6月の初めで、大変登山者が多かった事を覚えている。小さな子供のいる家族連れから中高年の団体など様々な人たちがいた。今回は雪のある12月に真新しい登山道具をおろしに行くことになった。女神茶屋前の登山口からゆるい坂を登る。初めてのプラスチックブーツはめちゃくちゃ歩きづらい。スキー板に着いている靴と感じが似ている。広葉樹林帯に入り、傾斜がきつくなってきた辺りでアイゼンを付けてみる。今まで使ったことのある軽アイゼンとはまったく様子が違い重いし危なそう、でもこっちの方が断然かっこいい。歩き方はロングスバツに引っ掛けないようにガニマタで歩くと教わるが、これがなかなか疲れ、すぐにばててしまった。本図さんと古山さんには先に行ってもらい、遠くの山々を眺めながら気持ち落ち着ける。やがて視界が開け、ゴロゴロ石を登るとだだっ広い山頂に着く。よく晴れわたった空の下には展望も大変良い。すぐ目の前には八ヶ岳の白い峰峰があった。山頂ではすっかり待たせてしまっていたお二人がとても寒そうにしていた。早々と山頂を後にし、蓼科山山頂のヒュッテの側で冷た

い風を避けながらの小休止（大休止だったかもしれない）をしていると女の子を連れた家族連れが登ってきた。山で会う子供たちは親から言われているのか習慣づいているのか、きっちりと挨拶してくる。自分などは照れ臭さのあまり中学生になってもぼそぼそとした挨拶しか出来なかった。女の子が笹沢さんに似ているという話になる。下山は蓼科山ヒュッテ横から急坂に行く。目の前を古山さんがサッサッ下って行くがこちらは雪に足を捕られてなかなか前へ進まない。後ろから聞こえる本図さんの注意事項を頭の中でグルグルさせながら、ようやく沢沿いの道に出る。ここでアイゼンをしまいワカンを装着する。ワカンの左右の見分け方を古山さんは「右、左って書いとくんだよ。」と教えてくれた。沢沿いのなだらかな坂道をしばらくたどるとやがて車道に至る。そこからは30分程の車道歩きとなるが、お二人は振り返る事なくあっという間にくねくね道に消えて行った。

スズラン峠駐車場(8:13)ー蓼科山頂上(10:52~11:35)
ー蓼科山荘(12:34)ー竜源橋(13:42)ースズラン峠駐車場(14:01)

(坂本(恵) 記)



蓼科山山頂にて

雪上訓練 富士山

1996. 12. 15

パーティ L 古山正文、菊池光夫、木村一、本図一統、告広道、今村宏、澤田仁、
新美達也、坂本恵美子、紺野哲雄

12/14 PM9:00土浦集合しまして、10名車2台で出発しました。高速道路に入る前に弁当等の買物をすませて富士山へと向かいました。そして15日になり1時~3時の間だったと思うのですが車止め駐車場の様な所に着きましたが、車はいっぱいいて林道を少し入った所に車を止めてテントを張りました。翌朝は晴れ、朝飯を食べて、林道を車で進みます。登山口近くに車を止めて、訓練のできそうな斜面へと向かいました。雪上訓練にきているバ

ーティも多いようで、その斜面は沢山のひとでした。我々もボロ上着を着込んで訓練に入りました。雪上歩行、滑落停止、耐風姿勢、ビレー訓練と真剣かつ和気藹藹とACC-Jの流儀で進んで行き、見事全員免許皆伝で訓練終了、下山の際にも笛の音に合わせて迅速かつ正確な耐風姿勢の訓練を行い帰路につきました。

(紺野 記)

甲斐駒ヶ岳黄蓮谷右俣

1996. 12. 22~23

パーティ L 古山正文、中居康展

かねてから行ってみたいと思っていた黄蓮谷だが、なかなか日程とメンバーの都合が出来ず、今年も無理かななんて考えていた。当初の予定では12月28日~30日が冬休み、ということで会の冬合宿には参加できないし、メンバーがいないし、どうしてもダメなら八ヶ岳でも単独で縦走しようかと思っていた。

それがまた12/22~23ならば古山教授が付き合ってくれるという。やっぱりというか無理な日程でも付き合ってくれるのは古山教授しかいない。3日の休みを2日に削るのは痛い。正規の冬休みを返上して山に行くことにした。ルートガイドを見ると、3日ならば余裕を持って抜けられそうだが、2日だと天候悪化したら厳しそう。天気予報を気にしながら、財力にものを言わせてアイゼン、スクリューハーケンを新調した。

いつものことながら無理矢理仕事を終わらせて出発。しかし天気予報では明日から天候悪化だという。

1日ずれていれば、と嘆いても始まらない。古山さんと顔を見合わせてどうしよう、なんて言っていたが、結局行ってみなければ分からないと出発することにした。首都高速を案外にすんなり抜け、順調に中央高速をとばし、韭崎から20号を経由して駒ヶ岳神社の手前にある駐車場に到着。中央アルプスに向かう本図さん一行と、一瞬だけ連絡が取れ、互いに無事を祈って



黄蓮谷・・・その1

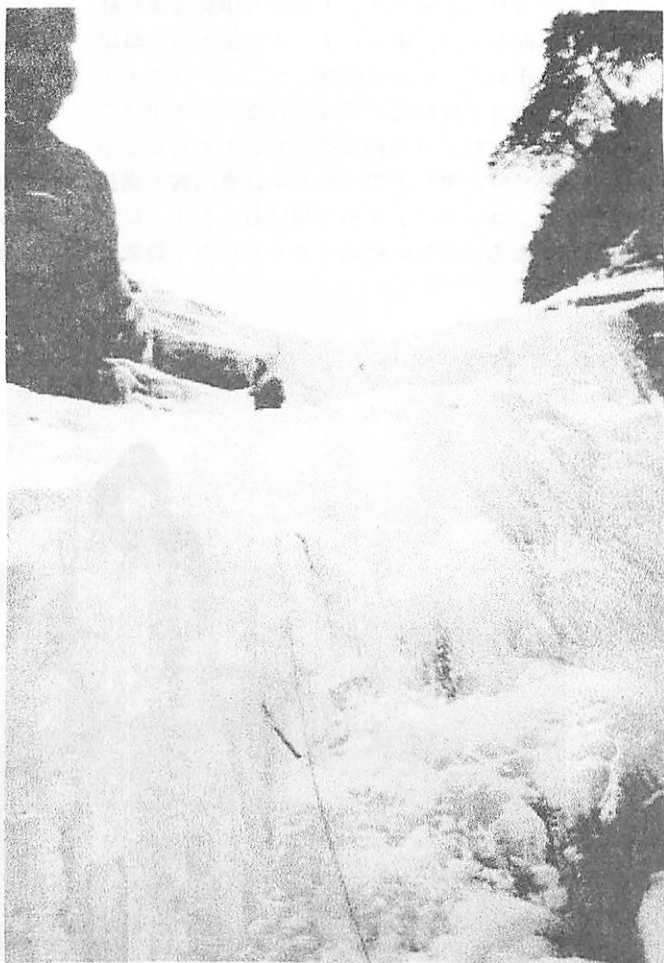
別れた。これもいつもの事ながら酒を食らって寝る。案外に暖かい。

6時45分に出発。三度目の黒戸尾根はやはり長かった。天気は快晴、久しぶりのザックが肩に食い込むがまあまあ順調に進む。刃渡りから本格的に雪が着いてきたのでアイゼン、ピッケルを付ける。五合目小屋に11時半、まあまあのペースだ。ここから小屋を回り込み黄蓮谷へ下降する。1ヶ所トラ紐にぶら下がって下るところがあったが、その他は順調に下る。沢は北面に位置するので途中から日が当たらず、冷蔵庫の中に入っていくようだ。12時50分、沢到着。最初の滝は凍結しておらず右手から高巻く。踏み跡を辿っていくとすぐに最初の核心部である坊主の滝である。早速このために準備したスクリーハーケンなどを取り出し登る。久々の氷の感触、しょっぱなからかぶり気味の傾斜に少し戸惑うが、特に問題なく越える。スクリーハーケンのセット感は感動的で、この手応えを味わっただけで

も来た甲斐があったというものだ。この後は大した難場はなく順調に進む。背中に見える八ヶ岳は眩しいほどで、翌日の悪天はこの時点では想像できない。奥千丈の滝は基本的に傾斜が緩く積雪もあってあまり高度感を感じない。ここはノーザイルで登る。奥千丈の滝の途中にビバークできる場所があり、前回古山さん達が登った時もここでビバークしたという。気付くと4時頃、いい時間である。2日で抜けるつもりなら、もっと先に進んでいないといけなのだろうが、そろそろ疲れもピークに達しており、整地してツェルトを張る。丁度沢の水が顔を出しているところがあり、水をつくる手間が省けた。ツェルトにはいると早速酒盛りである。少し早めに飯を食って、ほとんど工業用アルコールのようなウオツカお湯割りを飲む。今回は軽量化の為夏用シュラフなので身体が暖まっている内に寝ることにする。古山さんの持ってきたレスキューシートをシュラフの上に広げた。湿気が多く不快な一夜、案外に暖かいのが

救いだ。早く夜が明けないかと時計を眺めながら眠る。整地が不十分で寝返りもろくにできなかった。風がだんだん強まり、パラパラと雪がツェルトを叩いている。

朝5時、起きてガスに火を付ける。外は雪、ツェルトは半分雪に埋まっている。この時点で敗退が決定した。雪は案外に深く、このラッセルではとても今日一日では抜けられないだろう。更に雪崩の危険性も増している。核心部を抜けてしまっているだけに、下降もいやらしいが、やむを得ない。ツェルトを畳み7時に出発。硬い氷の上に不安定に雪が積もっており、亀裂の入っているところもある。奥千丈の滝は傾斜も中途半端で懸垂下降も出来ない。深いラッセルのところもあれば、アイゼンのフロントポイントを効かせながら、ダブルアックスで下るところもある。なおかつ雪崩の危険性もあるので緊張が続く。坊主の滝は、今回軽量化のため8ミリ30メートルロープなので一回の懸垂下降では下りられない。左手の藪をクライムダウンして、2ピッチの懸垂で下る。来たときは少し雪が積もった河原だったのに、一晩で深いラッセルになっている。足を取られつつ、この滝下に10時につく。この先は危険な箇所はないはずだが、再び五合目の小屋まで登り返しである。うっとうしいラッセル、ところが昨日のトラ紐の箇所がやはり難所で、岩の上に不安定に雪が着いており結構おっかない思いをした。五合目



黄蓮谷・・・その2

の小屋に到着。北風が強く、気温も急降下しているようである。丁度12時、本図さん達と無線連絡を試みたが、通じない。きっとこの時間には下山しているだろうと、黒戸尾根を下る途中も何度も交信を試みたが、出てこない。下山して携帯にかけようと言うことで、ただひたすら単調な尾根を下った。腰がガクガクになったところでようやく駐車場に到着。午後3時半、この状況で山頂を目指していたら、この時間頃に山頂だったのではないかと。荷物をまとめ筑波に帰ることとする。高速道路の途中で何度も本図さんの携帯にかけるが、全く返答なし。まさか不測の事態でも、と談合坂で晩飯を食った後で本図さんの家かけると、何と強風で下山できず、ピバーグしているとのこと。これも言うてみれば不測の事

態であるが、とりあえず生命の危険はないようなので一安心する。考えてみれば、敗退とはいえ、結構やばい状況だったかもしれない。帰りの高速は順調で、無事北茨城に帰り着いた。核心部は越えたとはいえ、山頂までたどり着いたわけではないので少々不完全燃焼という気もしないわけではないが内容としては今の自分にとって上出来だったのではないかなんて思った。しかし、いつかはヒマラヤを目指して、登攀能力を落とさないようにせねば！ちなみに春からは筑波なので、集会に出れそうです。

それではまた集会か、山でお会いしましょう。

(中居 記)

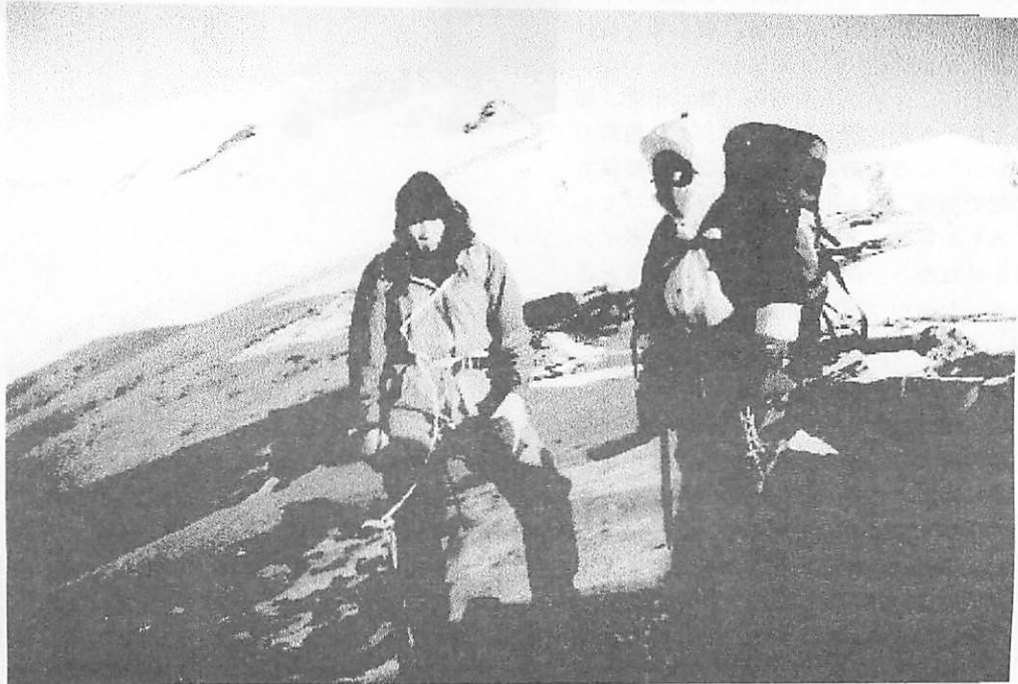
中央アルプス縦走（中退）

1996. 12. 22～24

パーティ し本図一統、坂本恵美子、笹平孝

中央アルプスはまだ登ったことがなかったので、ぜひ登ってみたいと思った。土浦から中央高速を経て駒ヶ根へ向かった。車はこまくさの湯と言う温泉の駐車場に止めて、そこで仮眠した。ロープウェイの所まではバスで行かなくてはならないので車はここに置いていった。バス停で待っていてもなかなか来なくて、やっと来たと思ったら中は登山客で満員状態だった。ロープウェイ乗り場に着くとすぐに出発の時間になる。一気に標高2600mの千畳敷カ

ールを極楽平めざしてラッセルし始める。極楽平に着くと広い稜線で風が強く吹いていた。そこからは途中にある雪庇に注意しながら特に問題なく稜線を歩いて行くと濁沢大峰に着く。1峰、2峰、3峰ともロープは出さずに登って行った。1峰は急な雪稜でピークを過ぎると稜線歩きになる。2峰は岩と雪の斜面をトラバースして行くような感じで、結構距離が長かった。もうこの頃は天気も悪くなっていて厳しかった。3峰はいつの間にか通り過ぎていたと



中央アルプス…一日遅れの極楽平にて

いう感じだった。そのうち松尾岳山頂に着いたが、視界が悪く近くの避難小屋が見つからなかったので頂上すぐ下の風があまり当たらない所にテントを張った。夜になると風が強くなってきて、一晩中続いた。

次の日の朝も昨日と同じく視界が悪かった。昨日の強風でフライシートの根元の所がもぎれていた。このまま進めば時間的に無理なので、予定を変更して来た道に戻ることにした。風が強く寒中黙々と歩いて濁沢大峰を過ぎたあたりから晴れてきた。しかし風は信じられないくらい強い風となった。岩につかまっているのがやっとで、1時間で数十メートルしか進めない状態だった。このままだと千畳敷まではとても無理だったので、やむを得ず尾根の東側の所でビバークすることになった。なんとかテントは張れて一安心した。今日下山する予定だったので本図さんの持って来ていた携帯電話で連絡をとることができた。

次の日の朝は風もほとんどなく朝焼けがきれいだった。

びっくりしたのは、強風でテントのボールがくねくねと曲がっていた。よく折れなかったなあとと思うほどだった。ビバークした所から極楽平までは距離もそれほどでもなかった。極楽平から千畳敷への急な下りはロープを使って降りた。今回の山行は何とも言えないほどの貴重な体験ができたので肉体的にも精神的にも成長できたと思う。それと、3人とも顔に軽い凍傷を負った。

1 2 / 2 2

駐車場(8:20)ー千畳敷(9:40)ー極楽平(11:00)ー松尾岳(16:00)

1 2 / 2 3

松尾岳(8:00)ービバーク地(16:00)

1 2 / 2 4

ビバーク地(8:00)ー極楽平(9:30)ー千畳敷(10:00)ー駐車場(11:30)

(笹平 記)

中央アルプス下山遅延の問題点と反省点

1 2月2 2日～2 3日の予定で、笹平、坂本(副)、私の3名は中央アルプス縦走にでかけた。その時、強風のため行動不能となり、下山が1日遅れた事について、ここに報告いたします。

2 2日午後には天気が崩れてくることは、天気予報などで十分に予想はできていた。決してなめていた訳ではないが、行動はできると判断し突っ込んだ。実際、吹雪で視界は悪かったが行動できた。ただ予想できなかったことは、彼女(坂本)が乗り物酔いをするということだった。しらび平までのバスでかなり酔ってしまった。私は乗り物酔いをしたことがないので時間がたてば良くなると思っていたし、彼女自身もそう思っていただろう。結果は2 2日夕方までゲーゲーやっていた。そのため行程は予定の半分も進まず、松尾岳までしか行けなかった。視界は無く避難小屋も見えず頂上でテントを張った。その時点で翌日は引き返すほかないことが決定的となった。明けて2 3日、吹雪で視界無く風が強い。彼女の調子は回復していたが、私と笹平が行動するには問題ないとしても彼女が心配であった。天候の状態が少しでも回復すればと1 1時まで様子を見た。タイムリミット、今出ないとロープウェイに間に合わなくなる。我々は出発した。極楽平直前までは順調に進んだ。天気も回復傾向で青空も見え、視界も

良くなってきた。予想通りだ。ところが予想外の事がおきた。突然烈風にみまわれたのである。その烈風たるや半端なものではなく、よく冬富士で練習する耐風姿勢などはまったく役に立たない。ゴーゴーとトンネルの中を列車が通過するような音をたて、ビッケルは舞上がり、ザックは宙に浮き、岩にしがみついていると飛ばされてしまう。普通、ザックは肩に食い込むものだが、逆にザックに引かれて空中に浮き上がってしまうのだ。ちょっとオーバーだと思う人もいるだろうが、これは事実なのである。「いいか、必ず風が弱まる時があるから、その時一気に行くんだぞ」と二人に声をかけた。今までに強風の経験はずいぶんとあるつもりだった。風には脈があり強風～弱風～強風～弱風と繰り返すのが普通で、耐風姿勢～前進～耐風姿勢～前進という具合に行動できるのだが、今回は吹きっぱなしなのである。稜線に出たら四つん這いになっても飛ばされてしまうのは確実なので、西面(風上側)の斜面をカニの横ばいみたいに行くが、彼女は岩にしがみついたまま動けない状態になった。私と笹平はなんとか前進できるが、彼女は岩から手をはなすと斜面を吹き上げられてしまいそうになる。這い這いしても飛ばされてしまいそうになるのだ。信じられないかもしれないが、体が宙を舞ってしまう感じである。私はハ

ングライダーをやっていたせいか両手を広げれば飛べそうな錯覚に陥る。少し前進して後ろを向くと彼女が来ないので、そこまで戻り手を引っ張って少し移動する。これを繰り返しているうちに顔面と右手に凍傷を負ってしまう。笹平が風下側に行けないですかと言うが、雪庇があるだろうし、それよりも稜線に出た途端吹き飛ばされてしまうだろう。ここまで来て私は“このままではヤバイ”と感じた。一刻も早くこの風を避けなければ、数年前に起きた、真砂岳付近で10名前後の人が疲労凍死した遭難と同じになる。彼女のそばに笹平を付けて、私は避難できる場所を探しに先行した。なかった場合は岩を支点に懸垂で雪庇を降りようと考えた。何とか東面（風下側）に回り込める所を見つける。東面は巻き返しの風が強かったが、飛ばされてしまう程ではなかった。ポールを鉋のように曲げられながらもなんとかテントを張れ、タバコを一服つける余裕も生まれた。

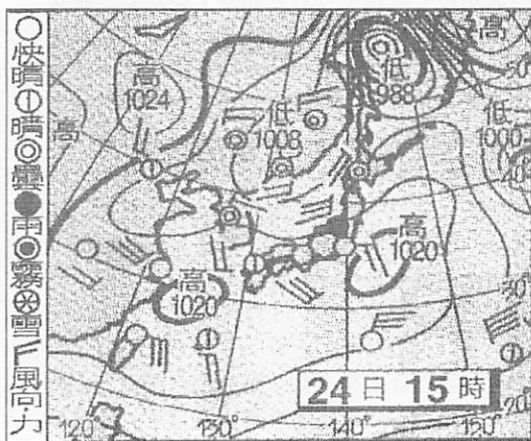
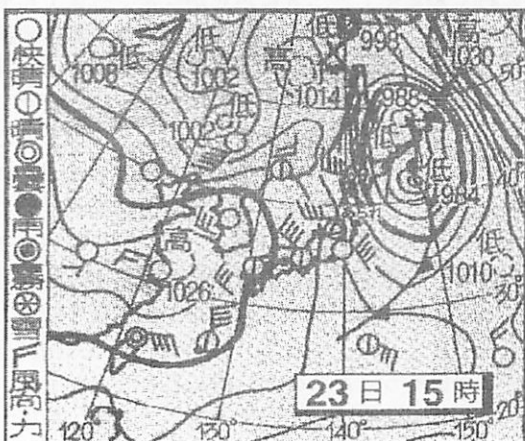
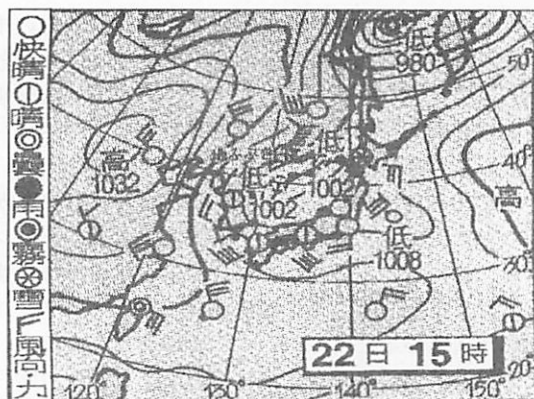
問題点

- ①天候悪化がわかっていて突っ込んだ。
- ②彼女の調子が悪かったのに行動を続行した。
- ③23日、天気好転しないのに行動開始した。

反省点

- ①油断と驕りがあったのではと言われても反論の余地はない。三千m近い稜線なのだから、パーティの力量を勘案し、もっと慎重に考えるべきであった。
- ②乗り物酔いって、少し時間がたてば自然と良くなると思っていたが認識不足であった。早い時点で引き返すべきだった。
- ③11時まで天気待ちをしていたのだから、悪天のまま行動開始すべきではなかった。つまり、日程に余裕がなかった。又、時間短縮を考え、彼女の荷物を軽くするためテントマットを持ってもらった。強風帯に入ったとき、体重の一番少ない彼女が、一番軽いザックを背負っては、動けないのは当然かも知れない。今考えるに、稜線など風の強い所を歩くときは、新人に軽い荷物を背負らせれば良いとは限ら

22日～24日までの天気図↓



ないということだ。ガサばらず重い物を持たせた方が安定することもあるのではなかろうか。

言い訳

①中央アルプスの位置からいって、多少の冬型でも行動できると考えた。23日の午前中まで荒れることはわかっていたが、予定通り行けばどうせ下りるだけだからと考えた。22日位の悪天で行動できなければ三千mの冬山を登ることはできない。でも23日の烈風帯での行動は無理である。

22日から24日にかけての天気図を掲載したが、23日15時という丁度烈風帯にいた頃である。天気図からも風の強いのはわかるが、それにしてもあの強さは、地形的に風の集中する所だったのかも知れない。

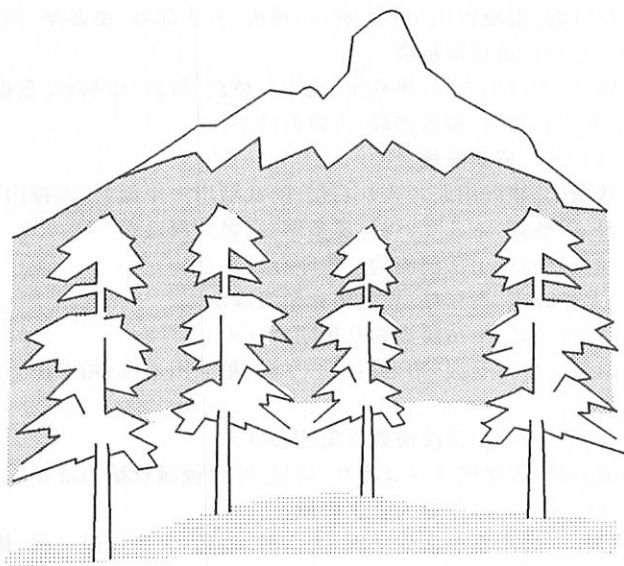
②言い訳をする余地はない。

③仕事に穴を空けたくなかった。私は登山で飯を食っている訳ではないので、仕事をしなければ山に行けない。という気持ちが先にたってしまったのは事実だが、無理をして出発したつもりはない。

遭難で無謀登山という言葉がよく使われる。確かに、多くの遭難の中には、そう言われても仕方のないものがあるが。一発勝負で一か八かでも成功すれば初登攀、どんなに用意周到に準備していても遭難すれば無謀登山と言われる世界なのである。用意周到の準備があれば遭難などあり得ないという考えがマスコミだ。私は冒険的要素の高い登山が好きである。冒険には困難や危険はつきものである。私に言わせれば困難、危険の全然ない登山ほどつまらないものはない。いくつも現れる困難や危険を、いかに回避していくかが登山の面白みである。ついでに言わせてもらえば、山に行っている限り遭難はあり得る。遭難を100%回避するには山に行かないことしかない。

どんな言い訳しても、下山遅延したのだから、リーダーの判断ミスであったことを認める。一部の会員に、心配をおかけしたことを心からお詫びいたします。しかし、いままで一度も山には持ち上げたことがなかった携帯電話が、今回はとても役にたった。

(本図 記)



《友好山岳団体の月報、会報、その他》

ありがとうございました

月報

◎Rohman NO.138, 1996, 10 B5 82P 浦和浪漫山岳会

秋の集中・会越・中ノ又山に5パーティに別れ集中、下田・駒出川岩滝沢・サワラ沢、駒出川三鼻沢・仙見川中俣沢・川内・柴倉沢、赤花沢第一ルンゼ、中ア・摺古木山・越百山、北ア・剣岳ほか

◎Rohman NO.139, 1996, 11 B5 36P 浦和浪漫山岳会

南会津・塩ノ岐川穴沢、東北・阿仁川ノロ川赤水沢・石黒沢右俣の左沢、守門岳・守門沢下松沢、櫛戸沢・会津朝日岳、特集・思い出の沢、行ってみたい雪稜、山スキールートほか

◎Rohman NO.140, 1996, 12 B5 44P 浦和浪漫山岳会

富士雪上訓練、越後・大兜山、奥多摩・南秋川矢沢軍刀利沢、総会資料、1997年年間計画表、会員名簿、1996年山行一覧ほか

◎月報・ZAC NO.175 1996, 4, B5 10P グループ・ゼフィルス

上越・巻機山・宝川温泉、越後駒ヶ岳・銀山平・道行山・小倉山ほか

◎月報・ZAC NO.181 1996, 10, B5 6P グループ・ゼフィルス

和賀山塊・堀内川マンダノ沢・部名垂沢下降ほか

◎月報・ZAC NO.182 1996, 11, B5 6P グループ・ゼフィルス

飯豊・大熊小屋・杵差岳ほか

◎月報・ZAC NO.183 1996, 12, B5 12P グループ・ゼフィルス

谷川天神平、吾妻・天元台スキー場・西吾妻小屋ほか

◎わらじ NO.487 1996, 10 B5 10P わらじの仲間

会津朝日岳、越後駒ヶ岳・佐梨川金山沢第四スラブ、第三スラブ、錫杖岳烏帽子岩前衛フェースほか

◎わらじ NO.488 1996, 11 B5 28P わらじの仲間

秋の集中・巻機山五十沢上ノ滝沢、中ノ滝沢、本谷沢、北ノ入り右俣、南ノ入り沢、米子沢、金山沢ナメ沢、米子沢、利根川、矢木沢川等、越後・水無川モチガハナ沢左俣支流Y字状ルンゼ右俣、毛渡沢大滑沢白坂右スラブ、荒沢山ダイレクトスラブほか

◎わらじ NO.489 1996, 12 B5 10P わらじの仲間

会務報告ほか

◎逍遥 NO.65 1996, 10 B5 12P 逍遥溪稜会

奥秩父・ヌク沢、谷川笹穴沢、湯檜曾川ケサ丸沢、白樺沢、万太郎谷、奥多摩・川苔谷火打石谷ほか

◎逍遥 NO.66 1996, 11 B5 30P 逍遥溪稜会

奥秩父・滝川榎ノ沢、朝日・金目川右俣、奥秩父・滝川豆焼沢、丹沢・伊勢沢、巻機山・米子沢・ブサノ裏沢、秋の集中巻機山・五十沢中ノ滝沢、船形連峰・大倉沢ほか

◎逍遥 NO.67 1996, 12 B5 20P 逍遥溪稜会

信越・白砂川魚ノ沢、巻機山・姥沢川北ノ入り右俣、阿武隈川一里滝沢、両神山・尾ノ内川キギノ沢、那須・苦土川井戸沢、丹沢・伊勢沢、キュウハ沢、奥多摩・真名井沢ほか

◎Next! No.10 1996, 10 B5 34P 山岳渓流釣り集団むげん

奥只見・大熊沢、黒部・上ノ廊下、奥只見・黒又川赤柴沢ほか

◎Next! No.11 1996, 11 B5 20P 山岳渓流釣り集団むげん

白神・大川本流・赤石川キシネグラ沢・粕毛川ウトウ沢・粕毛川本流・粕毛川下沢・大川大滝又沢・粕毛川本流ほか

◎Next! No.12 1996, 12 B5 24P 山岳渓流釣り集団むげん

檜枝岐・ナメコ穫り、南会津・大津沢ナメコ穫り、只見・叶津流域秋納めほか

◎とまのかぜ No.47 1996, 10 B5 25P 童人とまの風

只見・中の岐川平ヶ岳沢、二岐川平ヶ岳先ノ沢、大白沢、毛猛・大鳥川滝ノ沢、越後・水無川デトノオオナデ沢、御神楽・広谷川覚道沢ほか

◎とまのかぜ No.48 1996, 11 B5 14P 童人とまの風

- 只見・二岐川ジョウ沢～恋の岐川、谷川・鷹ノ巣沢C沢、丹波・小室谷、笛吹川・東沢ほか
- ◎とまのかぜ No. 49 1996. 12 B5 21P 童人とまのかぜ
北穂高～奥穂高、大山・甲川、ハヶ岳・地獄谷上の権現沢、御神楽・霧来沢鞍掛沢左俣、右岸スラブほか
- ◎山紫水明 No. 8 1996. 10 B5 14P 山旅の会
奥多摩・海沢下部瀑流帯、谷川・東黒沢～ウツボギ沢ほか
- ◎山紫水明 No. 9 1996. 11 B5 16P 山旅の会
白神・粕毛川中流域ほか
- ◎山紫水明 No. 10 1996. 12 B5 10P 山旅の会
丹沢・大山沢、鷹取山確保訓練ほか
- ◎溪游 NO. 72 1995. 1 B5 8P 溯行同人 溪游会
南紀・熊野川立間戸谷、奥美濃・金鷲岳ほか
- ◎溪游 NO. 73 1995. 3 B5 11P 溯行同人 溪游会
越美国境・荒島岳、中ア・越百山、京都北山・皆子山、六甲・大月地獄谷、比良・釈迦岳ほか
- ◎溪游 NO. 74 1995. 4 B5 7P 溯行同人 溪游会
越美国境・大日ヶ岳、比良・大谷川中谷右俣ほか
- ◎溪游 NO. 75 1995. 5 B5 6P 溯行同人 溪游会
大峰・池郷周辺ほか
- ◎溪游 NO. 76 1995. 6 B5 12P 溯行同人 溪游会
大峰・高原川文田谷～四寸岩山、九州祖母山・奥岳川川上本谷、大峰・上多古川本谷ほか
- ◎溪游 NO. 77 1995. 7 B5 9P 溯行同人 溪游会
大峰・上多古川伊坪谷、比良・安曇川口ノ深谷、鈴鹿・野州川元越谷、若狭・雲谷山今古川、台高・大又川石ヶ平谷、南葛城・上山谷ほか
- ◎溪游 NO. 78 1995. 8 B5 12P 溯行同人 溪游会
鈴鹿・神崎神赤坂谷、大峰・扇形山田ノ谷、下田・大谷川鎌倉沢、台高・本沢鎌倉黒石谷、中ア・本田切川中小川本谷、比良・安曇川明王谷～奥ノ深谷、スイス・アルプス南西部ほか
- ◎溪游 NO. 79 1995. 9 B5 15P 溯行同人 溪游会
巻機山・米子沢、南ア・遠山川加加良沢、北ア・黒部川赤牛沢、川内・中杉川、台高・本沢川釜ノ公谷ほか
- ◎溪游 NO. 80 1995. 10 B5 7P 溯行同人 溪游会
鈴鹿・御幣川池ノ谷、北ア・高瀬川滝ノ沢～ツバメ沢～燕岳、播州峰山・小田原川掛ヶ谷ほか
- ◎溪游 NO. 81 1995. 11 B5 11P 溯行同人 溪游会
播州段ヶ峰・倉谷、越後・登川支流姥沢川南ノ入り沢左俣、台高・三之公川明神谷ほか
- ◎溪游 NO. 82 1996. 2 B5 13P 溯行同人 溪游会
南紀・高田川梶谷、六甲・住吉川大月地獄谷、京都北山・城山、比良・堂満岳ほか
- ◎溪游 NO. 83 1996. 4 B5 9P 溯行同人 溪游会
北ア・西穂高岳、六甲・大谷川白石谷、湖北・伊吹山、鈴鹿・油日岳～那須ヶ原山、奥美濃・己高山、横山岳ほか
- ◎溪游 NO. 84 1996. 5 B5 6P 溯行同人 溪游会
北摂・大峰山武庫川西ノ谷、奥美濃・野伏ヶ岳、毘沙門岳ほか
- ◎溪游 NO. 85 1996. 6 B5 8P 溯行同人 溪游会
鈴鹿・矢原川本谷ほか
- ◎溪游 NO. 86 1996. 7 B5 15P 溯行同人 溪游会
京都北山・毘沙門谷、越前・部子山(山菜)、九州背梁山・ヤゴロウ谷、比良・中ノ谷αルンゼ、台高・櫛田川唐谷、九州尾鈴山・甘茶谷、ケヤキ谷、台高・櫛田川中ノ谷ほか
- ◎溪游 NO. 87 1996. 8 B5 15P 溯行同人 溪游会
比良・安曇川猪谷、六甲・生田川地蔵谷、屋久島・宮ノ浦川ほか
- ◎溪游 NO. 88 1996. 9 B5 16P 溯行同人 溪游会
台高・北股川柏原谷、大峰・上多古川上谷本流、台高・本沢川白倉又谷、氷ノ山・八木川源流右俣～左俣、中ア・空木岳東川奥二又沢、高野山・不動谷川弁天谷ほか

◎溪游 NO.90 1996.11 B5 24P 溯行同人 溪游会

扇ノ山・岸田川三倉谷、四国阿波・海部川皆ノ瀬谷、大峰・下多古川本谷ほか

◎すずらん通信 NO.189 1996.12 B5 12P 鈴蘭山の会

会務報告、97年間予定表、秋季岩トレ(十里木駐車場で幻聴が!!)ほか

会報・記録集・報告書

◎通信・植村冒険館 NO.7 1996.11 B5 6P 植村記念財団

～仲間が語る植村直己～ほか

寄贈会報一覧表(当会の会報も送っているのに載ったことないのはなぜかな?)

◎年報わらじ NO.19 1996.12 B5 313P わらじの仲間

1995年度の活動報告 夏合宿 朝日連峰・三面川竹ノ沢中掘沢、中俣沢、荒川東俣沢左俣、二口山塊、冬合宿北ア・剣岳小窓尾根、春の集中奥秩父・一ノ瀬川大常木谷、大洞川樫谷、滝川八百谷、槇の沢、後山川三条沢秋の集中越後駒ヶ岳・佐梨川桑ノ木沢、水無川モチガハナ沢右俣、北沢本谷、北ノ又川滝ハナ沢、川白沢、三国川栃ノ木沢コウガイ沢、サブ合宿 足拍子山・クロガネノ頭北尾根、コマノカミノ頭北尾根右稜、南尾根、沢登りでは北海道東北・白神、朝日連峰、吾妻連峰など五本、会越・御神楽岳、鎌房山など四本、川内・中杉川、越後上越・駒ヶ岳水無川、巻機山、苗場山、谷川連峰、奥利根、足尾など十五本、東京近郊・奥秩父、奥多摩、丹沢など十二本、信越北中南ア・五本、雪稜の部では金城山北尾根、北ア五竜岳北尾根、白馬岳主稜、爺ガ岳主稜、岩登りでは御神楽岳前ガ岳南壁赤いスラブ、一ノ倉沢、幽ノ沢、剣岳チンネ、前穂高屏風岩、北岳バットレスなど十二本、山スキーは東北、上信越、尾瀬、頸城、北アなど十二本、縦走の積雪期では飯豊、北蔵王、越後、上越、谷川、日光、大菩薩、白山、北ア、八ヶ岳、南アなど十九本、無雪期では北海道から四国まで十本、海外ではバキスタン・ブルーダルピーク、研究として飯豊連峰・無雪期、溪谷初遡行記録集ほか

◎溪のネットワーク通信 1997.1 A3 4P 溪のネットワーク

大規模林道建設反対運動や新聞の切り抜き等(我々遡行者の立場に立つ自然保護団体の機関紙)

◎溪流'97Spring Vol.87 1997.3 B5 178P つり人社(吉川企画制作事務所より寄贈)

白神山地・横断紀行、下田・笠掘川大川、川内・谷沢川本流、南八幡平・玉川大深沢、朝日連峰・八久和川、会越・叶津川大三本沢、和賀山塊・齊内川、朝日連峰・湯井俣川、上信越・清津川サゴイ沢、最先端そして伝統春からの本流釣り・三本、伝説を訪ねる釣りの旅・五本、溪流文献目録'96ほか

以上閲覧したい方は本図まで

《編集後記》

久しぶりに山の夢を見た。それも何故か単独で岩を登っている夢を。どうも滝谷はP2フランケ早大ルートのような、ヨーロッパの岩場のような、はっきりと場所は指定できないが、すがすがしい空気の中を一人、ひたむきに岩を登っているのだ。近くでは小鳥がさえずり、声援を送っているかのようで、気分も上々、まるで映画のクリフハンガーのシルベスター・スターローンの様な登りで地球独り占めってな雰囲気、気持ちのいいものであった。充実した登攀も核心終了後テラスで一休み。すると遠くから風の音かな？微かな音が聞こえる。じ〜っと耳を澄まして聞くとジリジリ〜ン、ジリジリ〜ン、との音。その音に吸い込まれるようにふっと我に返った。それは目覚まし時計の音であった。そこには、惰眠をむさぼる平凡な青年がいたのであった。

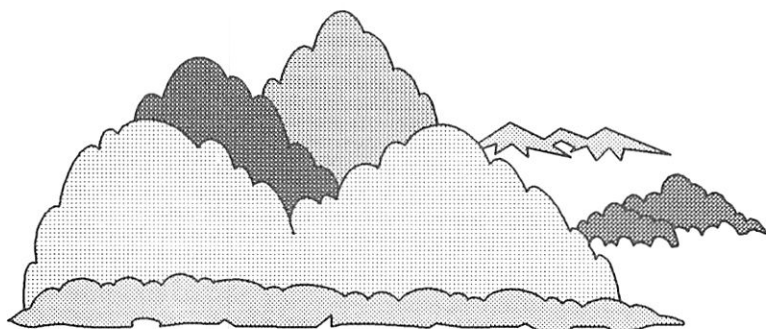
……「遙かなる遠き青春の足跡より」生井著 より抜粋……。

何て、いつかどこかの本に抜粋されるような文が書けたら楽しいだろうなと、くだらない夢ばかり最近は見ると。が、否。この会報をきっかけに皆さん大きく夢を持って文壇に仲間入りしようじゃありませんか。

何時かは、登って、歌って、書けるスパークライマーに。チャンスはすぐそこまで来ている。

印税で山に登れる日は近い！。

(編集長)



季報[R&V]第23号 発行1996年 秋

発行者：鯉河仁志

発行所：ACC-J茨城

〒306-05 茨城県猿島郡猿島町逆井318

生井一男 方

編集者：生井一男

印刷所：やさと印刷
